東海道名所圖會

四

東海道名所圖會卷之四

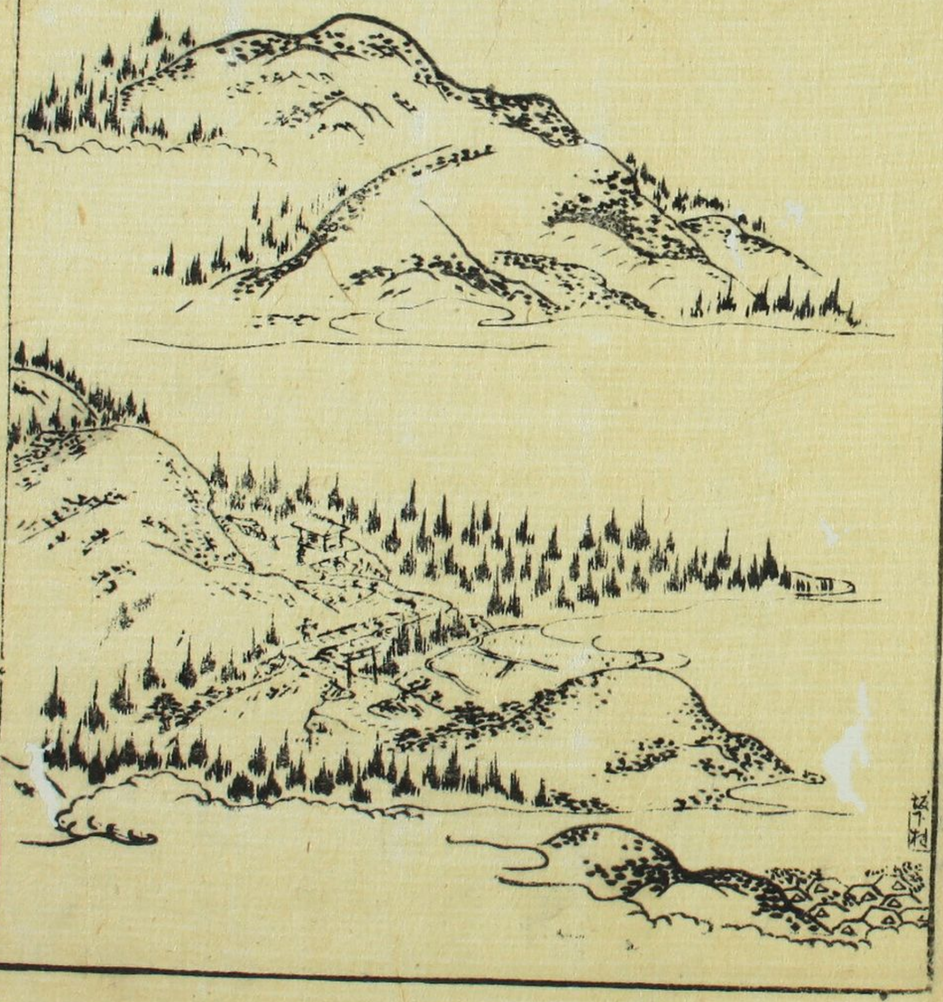
目録

稲葉山　佛殿　秋葉權現社
白山祠　天滿宮
奥院　二ノ居　三ノ居　什寶
名產葛布　七瀧
妊婦塚
菊阪　已等麻知神社　○日坂
淡嶽　子育觀音　京丸
敬滿神社　大井河　駿遠兩國一覽
瀨戸　名物漬飯
蓮生寺　○岡部　多宝塔　鐘樓
○丸子　名產盃石　禪堂　神像藏　經堂　傳藏井
古枯松　連歌師宗長古蹟　嘯月亭　建穗神社　建穗寺　用宗古城
○藤枝　那閉神社　宇津山　蔦細道　手越　手越少將古蹟　繫山
田中城　○掛川　佐夜中山　夜泣石
牧原　阿波波神社　無間山觀音堂　半僧坊
諏訪原古城　菊川　初倉山　○金谷　○嶋田

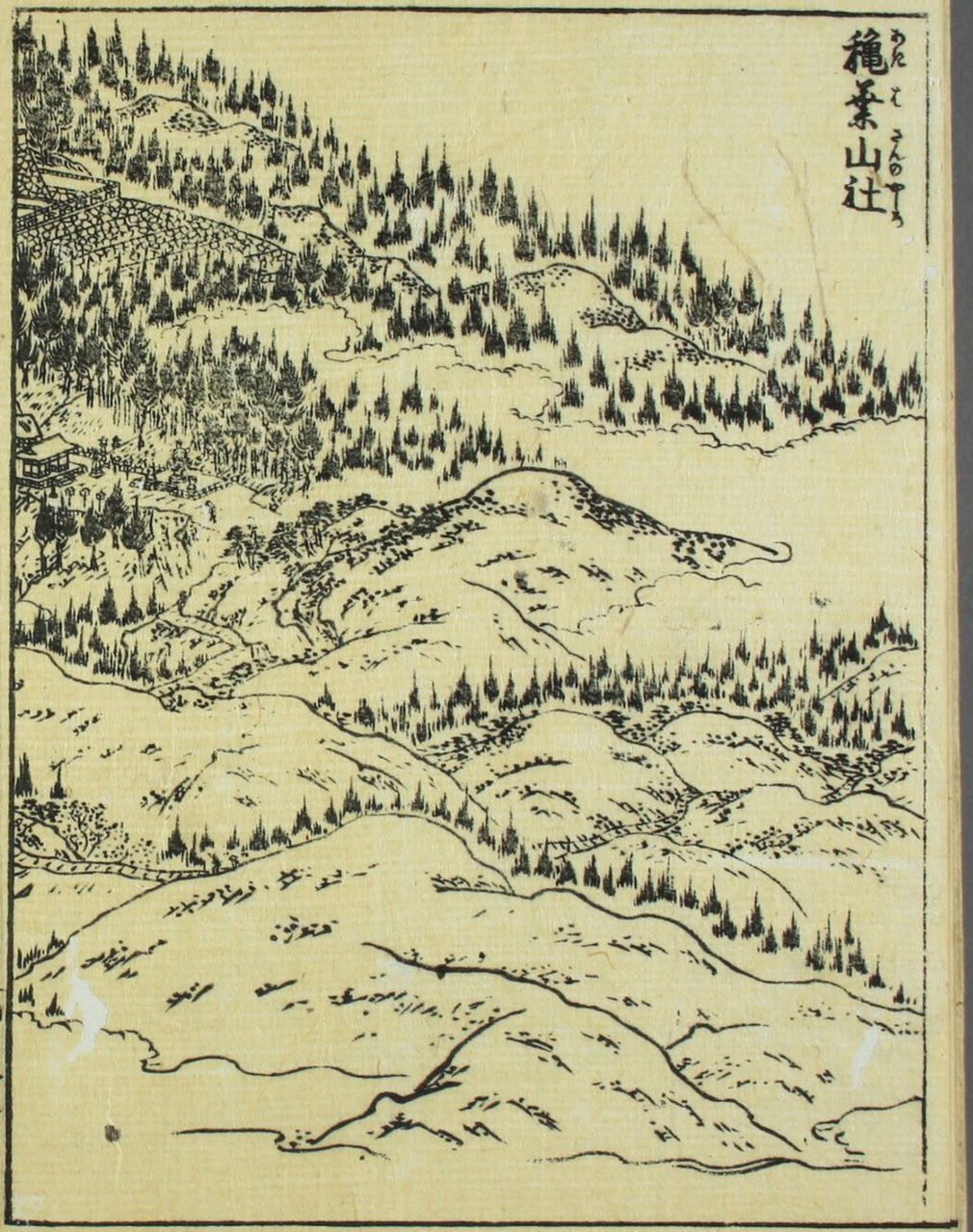
常磐舍藏書印

安部川
賤機山
清水
燒津神社
姥ヶ沈
三保松原
瀨名川
淸見閣
淸見潟
石浮屠二基
淸見寺ト景詩
古奴妾濱
薩埵嶺
足利尊氏直義古戰場
○由井
弥勒柔屋
○駿府
紙商
糸山
足久保觀音
名產の陪茶
草薙神社
楠の大樹
有渡濱
御穗神社
庵原
淨見嵜
淸見寺
佛殿
開山堂
足利尊氏像
龍虎二画
甲州身延山道
○興津
岫嵜
袖師浦
名產栄螺鮑
○江尻
羽衣松
廬嵜
客殿書
衝立二画
奥津川
磐城山
豊實神社
○蒲原
蒲原古城
富士川
久能寺
仕舞
久能山
淸見潟
角田川
梶原一門塚
麻機山
別雷社
の陪茶
富士川紙名
曾我兄弟孝養之書
古家川
浅間神社

秋葉山
一鳥居



稲葉山辻



長三尺許 木基大士の作 脇士勝軍地蔵

本堂聖観音 十一面観音 秘仏 同作

秋葉山権現社 本堂の側ゟ西 南山鎮守と号ク 祭神大己貴命 或伝延喜式内 小國神社 秋葉同社ゟ勧請ス

三尺坊 南山護神 多宝塔 大日 秋葉社の側ゟ西 秘仏

禅堂 本堂の右ゟ有 経堂 禅堂の右ゟ有 白山祠 本堂の右の方ゟ有

天満宮 本堂のお左の方ゟ有 鐘楼 経堂の後ゟ有 神輿蔵 秋葉祠の右ゟ有

勝織弁 本堂より八町許 南山の名勝 一ノ鳥居 坂下村の上ゟ有 額 金明山額

二ノ鳥居 一ノ石の上ゟ有 額 最勝南 奉勅修行八十三箇方面山書

奥院 本尊不動明王 傳教大師作 龍頭山と号ク 本堂ゟ乾ノ方 女人結界 額

夫南山は寺縁起を考ふるに舊記見へず 然ども云ふ 元正天皇御宇養老二年ゟ僧正行基錫を曳て登ラ老杉を伐て聖観音を彫刻して安置ス

十一面大悲の尊像二軀ゟ彫刻ス 本尊ゟ脇士勝軍地蔵 若創ハ云ふ 行基大士を文殊菩薩ゟ化身と

天竺波羅門尊者来朝相見の時権者ゟ事ゟ南都東大寺ゟ

記傳ゟ鮮ゟ南寺の鎮守ゟ神ハ延喜式内小國神社と号ク 神躰ゟ大己貴

傘ゟ被レ 秋葉権現と称ス 一山護神ゟ三尺坊と同社ゟ祀ル 大悪人身

の時ゟ信州の産ゟ 其母ゟ観世音ゟ霊告ゟ 品ゟ頼ゟ 数百

巻ゟ連ゟ感ゟ 大悪三十三身の中ゟ 迦樓羅身ゟ現ジ

妊體ニ臨月ゟ到ル 徳ゟ満ゟ 男子ゟ誕ゼ 父母歓ゟ悦ヒ

成長ゟ従ヒ出家ゟ 熾盛ニ 飛行自在ゟ 神通ヲ

此時不動ニ時ゟ法ゟ 八千夜 八千童子ゟ 八千座ゟ

猛火ニ 燃上ゟ 烏形両翼ゟ

右ゟ劍索ゟ 持ル 左ゟ 羂索ゟ 持ル 一

心ゟ観念ヲ 忽煩悩業生死ゟ 苦患滅盡ニ

得ル然ニ 一ツゟ白狐出現ゼ

所ゟ永住ニ 成就ゼリ

此秋葉山小白狐さゞ海る国益さ
の安一ゐふ大悲ゐ尊像左セーうば
開基半老二年さう九十年ゐ後ふて　後藤天皇寺宇一大同四年ゐ事ゝ
其後弘仁二年さう諸国ゐ遊化一て普く元生ゐ利益セんさて盡嶽靈
窟ゐ我ゐ一ゐる名山名蹟とゞりゐふ其ゐ星ゐ稲狭り／へて四百
六十餘年ゐ後　伏見院御宇永仁二年八月中旬ふ本ゐ秋葉山嶺ふ帰
ゐありあさと大登山と號まるゐ南海の汀さり次ゐ攀ゐて山ゐ軸
隊さう又五十町とまる山標相ゐ佛地ふ到るの入路十住十行十回向十地昇
進一て修一ゐり階級四十二位と候まる文殊普賢弥勒を頂上ゐ則八葉ゐ蓮華ゐ臺ゐ
ゐ如ゐ上古此山ふ水ゐかりさゐゆゑ寺伽藍さそ鎮護ゐ神社ゐ祈誓一
ぬれどこ天狗八郷ゐ招請一けれゐ多應驗ありて霹靂震雷一夜ゐ中ゐ西ふゐ
隅ふあさりて清泉涌出さり財ゐ

人歓喜踊躍一て水中ゐ足れゐ潔白ゐ明珠二顆ゐり是蛟龍領下ゐ
寶玉ゐ又蝦蟆歩ゐ背面ふ龍葉ゐ二字ゐ頂さ遊ゐ来ゐ国益寺ゐ
秋葉さ號ゐかゐ龍ゐ玉ふ今ふ寺鎮さ一て寶庫ふ藏む蛾嫩ゐ弟水
底ふ入ゐ是ゐ加之ゐ清泉ゐ寛永年中山號寺ゐり
楼さ織ゐれより汲水さ一楼織井さ唱ふ其織さる布ゐ青銅十
疋ゐ副て住職ふ贈るゐれ又本ふ寺ゐ寶物さ一機布さ住職乃
涅槃衣さゐ一寶ふ不思議ゐ霊水ゐ大旱ゐ時雩ゐれさ忽
膏雨降さ是龍神感應ゐ名水ゐ秋葉山暑傳起ゐ擬ゐくゐ
水一古縁起看記等さ享禄天文ゐ間田州武田信玄ゐ騒擾ふ
罹て兵燹ゐ爲ふ焼亡一ゐ秋葉神社観音堂幷ふ遺り寶品さ
寺僧携ゐ逃免さゐ今ふ存さ甲州乱妨ゐ軍勢堂社ゐ
焼拂一ゐやて救今ゐ火炎ゐくれどゐ棟上さり白水流れ出て火炎ゐ
免るゐれさ應驗著一ゐれで近年都鄙ゐ参詣暑寒ゐ嫁ゐび

燧のぬく遥ふほとひ秋霧蒲とて國々縣々少て多くは人数を聚ん
風景よく宿々札泊札辻々別札路の標石あるひは石燈籠仮建く
常夜を照し勧請の祠や京師洛東聖護院村より近年経営ありて
紫庭の御祈禱所とこれを初として江戸大坂其外諸國ふ多く
なりも信人つとひて旅人ら多し藤小雨山北四日ら月毎の
縁日とて山篭も衣裳改め女房ら跣足垂毛塔断寒垢離籠每々
新端とつゝね山上山下茶店の旅ひ坂下村の旗籠戸舎の宿々
みるし神の霊験多くべし年毎礼例条ひ十一月十日より十六日小至待
し夜半の時社頭の浅なる白砂小散て火鎮の神楽あり御神楽所湯
と捧る其時第八条信の御見仮禁び拝れより七十五膳の神供仮
備ふし時ふ至て山嶺山籟を震動もる事暫久し蔵云山神多く
さゝふ雲霞も法楽歓喜の春こと我ふ知れ峯遠近ひいろ〳〵山坊ふ
一夜籠り社おゝ数孔もる事稲麻竹葦のぬし道中礼旅ひ
馬牛雲ひ繁昌歌多もろくふ多くし中に書一巻ひ弓矢
刀杖の横難を免れ身二ふひ火災焼亡の危急仮免れ事こふ清水流渡
し雑仮免れさる中古兵火の時も軍卒多く焼ド其餘煙ふろ〳〵社
頭の檜皮ぶし火ふ焦ひの時水雲起りて雲ら消ここし今ふ遺りてふ〳〵
火伏鎮護の神徳衣生化益の方便海内一条ふ伝敬せんとい事多し

三尺坊書物 社前ふあり龍王縁起ふいう 永仁二年八月十六日
駒角 駒玉 鹿玉 鳥玉 不老貝 社中ふ竜てあるいろ〳〵ひ百歳を経ふ中ひ肉身の蓮
秋葉山道法 上方末師より伝ひ仮ふ風来寺へ参徹し〳〵
大野川あり吉田豊川の上し大聖の岩と屏く細川巣山ふ至れ
二遠の囲堰し大平 神泥 磯石打ふ天龍の枝川の上あり
ふ石打村の渓川 推草仮多く猿ら山道猿多く それら戸舎と
ふ山里ふ至ら風来寺 くら〳〵ひ秋葉山の
社まて八里半くや余 くら〳〵多絡まるふ掛川の宿より
ふ入〳〵森の宿へ踏さ一の瀬へ至る比ろふ渓川あり こ右へつゝら
た入て舟〳〵四十八ケ瀬あり土人ふれをいろは川といふ歩行
つゝら〳〵てその広ら〳〵夏ふ時々洪水あしてふ
橋ふ〳〵旅人ふれよ難む一ノ瀬ふ仮橋あり
あり舟ふ〳〵もふれら大居ふ至る掛川より秋葉山まて九里半
より

風来るよう
秋深山まで
八里霧みち
心旅人真中の
大野くいく
あの女ハ旅人
のそば
脊負て
坂路を
やもり
ゆうて
世わうと
する
洛小夜脊
負の
婦人ハ
比せん

秋深の迫く
石井村也
溪川ふ椎林を
まく之双べく
椎茸ーと似ふ
匂ひくく
此地の名産とん

七瀧　閑穀川より粟ヶ嶽山の逆川東山村より西南十町許の寺村の山中にあり
瀧の高サ百丈にして七段に落る故に名とす

京丸　秋葉山の北にあり山家にして一村の名也民居僅に五軒許其長を
源左衛門尉といふ家に代々の金巾子の冠緋緞の直垂錦の公家の装束を所持せり
古證文綸旨一紙を所持し土人云むかし其苗孫なりと云傳ふ
逆乱に襲れ此山中に隠れしに云ふむかし今川刑部大輔氏直

掛川　日坂まで一里廿九町驛路鈴に云
といふ人駿州の武田信玄に攻られ土岐の山家に落行其後高天神に
籠りる永禄十二年濱松の軍勢に攻落され城外にかくるゝを
しゝ桐然に松井左近忠次の兵卒岡田竹右衛門石川新左衛門
左右田おき舊記に残紙今を又之月高城へ出数城外にかくれ合戦を
審す菅沼三九郎高橋傳九郎松下加兵衛等今川氏眞掛川
是非城中等はなくその月六日今川氏眞
の城を抱る事叶はずして遁れ出て同国懸塚より船にて
小田原に落行給ふ同題高城を石川日向守に賜て
それより代々の諸侯是を守護し給ふ

冨士紀行
おりにふれ被さく錦にかけ川やいろぬれ衣に秋のひら衣　堯孝法印

名産葛布　葛布は色々ありて呉服の市店に出る多くは輔務に用ゆるの
掛川の名産也下坂といふ銀治も此城下にあり又鼓の皮を出す

藤枝中
これも此所名のひゞくに葛てふ布は掛川の名産也　為相

已等乃麻知神社　延喜式内佐野郡に属す又一説に云掛川城下海道
日坂のおし西の方宮村にあり今磐田八幡宮と称す
節の裏田の小社は又の大仙寺村諏訪社は此社とも何れか分明ならず
此所のおし西に垂川といふあり此社逢ふ鎮山とぞいふ

鎮の山なり古いより碁石出る里俗云むかし此神の姫は龍宮へ通ひ
と何ひしかども神ありしかいかん龍神これをと腹ふてし掛井川へ
出し雌雄の龍神ふさしく姫を奪ひ去んとし給ふ御神事上碁を
圍んて居る所へふより碁盤を投かけ龍灘の鏡は岩に
投録二つの山と成つく今ふあり碁石の出るを雌くわしかちも
とひ姫と投居し所を今に閣碁村といふ

文徳實録云嘉祥三年七月遠江國事任社
授従五位下

三代實録云貞観二年正月廿七日戊寅授遠江國
真知乃神並正五位上

己新乃二字恐写誤

橘守部云
ことのまゝ此神をとろのもしはのこゝろたのみやいつれ申るたき
ありふりいとおりしき

十六夜日記
廿四日あるふたりしかのさやの中山こ事任といふ社の傍に
通りいとおのしき山かけにて嵐もおそらく寒きかくもいかならんかくて
遠近見ゆるは遠山に似るかんかそくたつれの海の
里ほく川といふ所にとゞまる

夫木集
独かひてたのもしかるも東路にこの鳴まもそおりける　相模

名寄
又まんなん…ちりすみすいかみち集　七明

ここのまいさご浜の西の方一帯まで其中まつをまつことく
いてくつのひつけらしく
ゆふされはてそたのむのまつかこのまつ風
負應海道記 山口といふ今宿坂をくだり旧ふるよりく通ぜり菅原伏藤ふしさを
むしとさゝやきあひくりかく社よ参詣の老婦
ちゝび伴僧おとしまいらん薩埵をまいらん本丹をた神うゐ
うべしと身もおぢまふ浅身もおぢまふ
とも立くらもつくもはいつくえ
納受して真實不虚の感應をこうむれた万へ
おとふこのまくらのちひさきそ杉たてる井のちひさきそ
曙記 おとの滝つれ屋ふろみて 大廣々
みつ花ちる井はまりせてあまちふひろあのさとのまくらいの 光廣々
入坂を越むとて大二の町をうつ花表小松咲ぬる

鄙坂おもくおもふこいまた見さりし初松ふの栄これ
たちもふ神れ花表初をうつまれてもも外ふそ 光廣々
あつさよりまさを来ぬれど山さくら
天文四年三月於泉大納言まふ久々東武ふ記 日坂山口ふいの滝まで半任といふ社をふつ拝
大井川ふのりふねを流してふふまでといのふ祚垣 洛泉寿ふ
和漢年代記云 欽明天皇十六年乙未二月大已貴神遠州周智郡
小現れ坂 事任神社と崇む 同智郡 延喜式 佐野郡正一
蔵餅を製しく売ふ 或ハ西坂とも書ふ 鈴屋まで三里二十九町 此所の名物ふ
此所の民のうひ餅を製ふ注連の右飢を越よのふいふ新坂
うちひ餅とく其名あるとのく或い葛の粉ふまぜ
粉ふ産をねして旅人ふまくむ人我の葛餅ありとまのく其葛
餅といふ事ふ坂神社ふ茨くく老芋ふ得うる
人もおりくとのく

婆の叫 焦 婦 喚 供 傳 人 歸 食 在 途 中
憑 誰 教 得 西 山 餓 馬 首 次 衆 餅 餌 風

羅山

佐夜中山

佐夜の中山　昔は此の東海道細道なりしが、後に東山道と共に修理せられて、駅路となりしかば、故ある東山と人傳へ歌の中山と云ふ。今は東海道の新坂といふこれぞ実久しき都の跡なるべし。

方角抄　よれたる山の西の麓なれば、いつまでふるさとの中山ともありぬさま、況や東海道中納言卿長久き國の任ふ〳〵ひりの下作りなるべく〳〵中古の比ん達ふじ老翁よりいさゝうの長山と称せり。又或が云ふ駿河の方に接るふじ山遠江國佐野郡とも山郷まで〳〵いふ〳〵ともり名高き古今東西のこひぢ沈さもうもみ〳〵ふ〳〵

千載　よゝ〳〵の蔦の細道ふみ見るさへ中山

新古　古々の〳〵ふみ侍さ越ひて月ぞ

同　岩間ひの森ふめ〳〵〳〵沈行ちかれて狩ぐ猶なんやよの中山

續後撰　こひう絶ふさゝ雪白〳〵行垂月附ぬてるさゝの中山

新後撰　まちつゝひさ夜の中山中〳〵ふ一葉はら〳〵ぬ時ぬこう跡

同　名ぬ者を葉原の里ふさ〳〵拾て筏流くこゝるさゝの中山

八雲御抄　大阪の方

長秋詠藻　

夜寒の月

後拾遺　藤衣夕暮おさむさこゝぬさゝの中山

續千　月待て狩ぬゆうむ夕暮い道〳〵ぬ横雲

同雅　落つすゝさよゝ中山さよ中に鹿も鳴つまも恋〳〵

同　紫ぬ雲〳〵いの波とふかけて覚と多るさゝれ中山

新拾遺　のへのさゝ狩いつぞ〳〵つもる〳〵んとゝふ〳〵さゝれ中山

ゝゝひみん　ゝゝ花の紫ぬぬさゝ中山ふ例ぬもんぢとくあらねゝ跡里ふ

菊川　とつの所ありまくふやくまる

ゝえゝ〳〵春姫のゝゝさゝ夕園ふ花風とるさゝよ中山

あゝ川　花ありゝ〳〵みれゝ月もゝてふゝり

雲の〳〵ぬさゝれ中山さえぬさは都ふつけよ有明の月

ぬをゝいゝ〳〵春ゝ

いさゝ〳〵んとゝひをゝ〳〵ゝまちにあゝとゝろい菊川の水

夜寒の月

藤衣夕暮

後拾遺

續千

同雅

同

新拾遺

ゝゝひみん

菊川

あゝ川

雲の〳〵

ぬをゝ

いさゝ〳〵

雲助行

雲助是何者更非
雲助兒尋昔元歷
歷如何今此姿一
朝蒙勅當十年受
艱難踏盛體能周
王秋肥每寒玄古
餓迫門坂東酒涙
身雖痩我非病雖
壯唯是貧袖裏肘
白見梳斷足殊輕
街巷街道筋欲拔
生馬瞎夜宿建念
寺月當勝員濃偶
雖一盃受未見在
所松莫謂吾無舍
幕天坐太平一本
有竹扶萬里可
横行

銅脈

まくら記より
佐夜中山ハ古今集乃前ふよこをりふせるやよまれさせハ名高き
名所となりしを紀られもうたよみふいちしんが詠し小深山ふて
松杉おふしきげしく東ハ野山ふて秋の花つゆさぎし谷ゟう
峯ふう川る白雲よりか入まちして麓の音啼をもきかし
虫の旅おりつき涼し

あきの夜ふ峯わけもし絶して雲ふ休らふ佐夜の中山　まさた

東関海道記
佐夜中山ふ至り此山口ふ右ふ尤れが花ふ深谷右も深谷一峯
あざさみちを塘のうへよ似さり右谷の指眼下ふ見て雲の路を足
の下に聞〃谷の底行ゝ高く又山のあいだを通るこれハ中山とかねてきゝし山を
むかし此折のこゝちふる紀がゝし根をわたるまゝ忠千條のみやこり
みるたつさし此所を其名ゝふ岁はるやさ衰されど一時のほやふ百艘
まさまりてあるか光ゆけハ秦蓋の夜のさゞハぬれぞして耳とあるひ
高陰の風のひゞきハ足たゝぶしく身ふしむ

ワけのほうさよみ中山をかくふまするゆゑぶりぞるゝらんる

曙記
佐夜乃中山ハみよ海道ありといひしさと並半れりしぬりちく
はくしなりぬて

うれしさもうき紀もワそれく今ふさへて来みおもひのさ夜山ふ　光廣卿

東紀行
隊ゑふほく松ぶゆきくりゆくかくろ紀さ夜の中山　為村卿

内裏紀行
西行法師がいのちなりけり佐夜の中山と詠せしハすくせの事て

夜泣石
坂道升降是早し天夢殘馬上不成眠
此山無限西行書能使詠歌千古傳　羅山

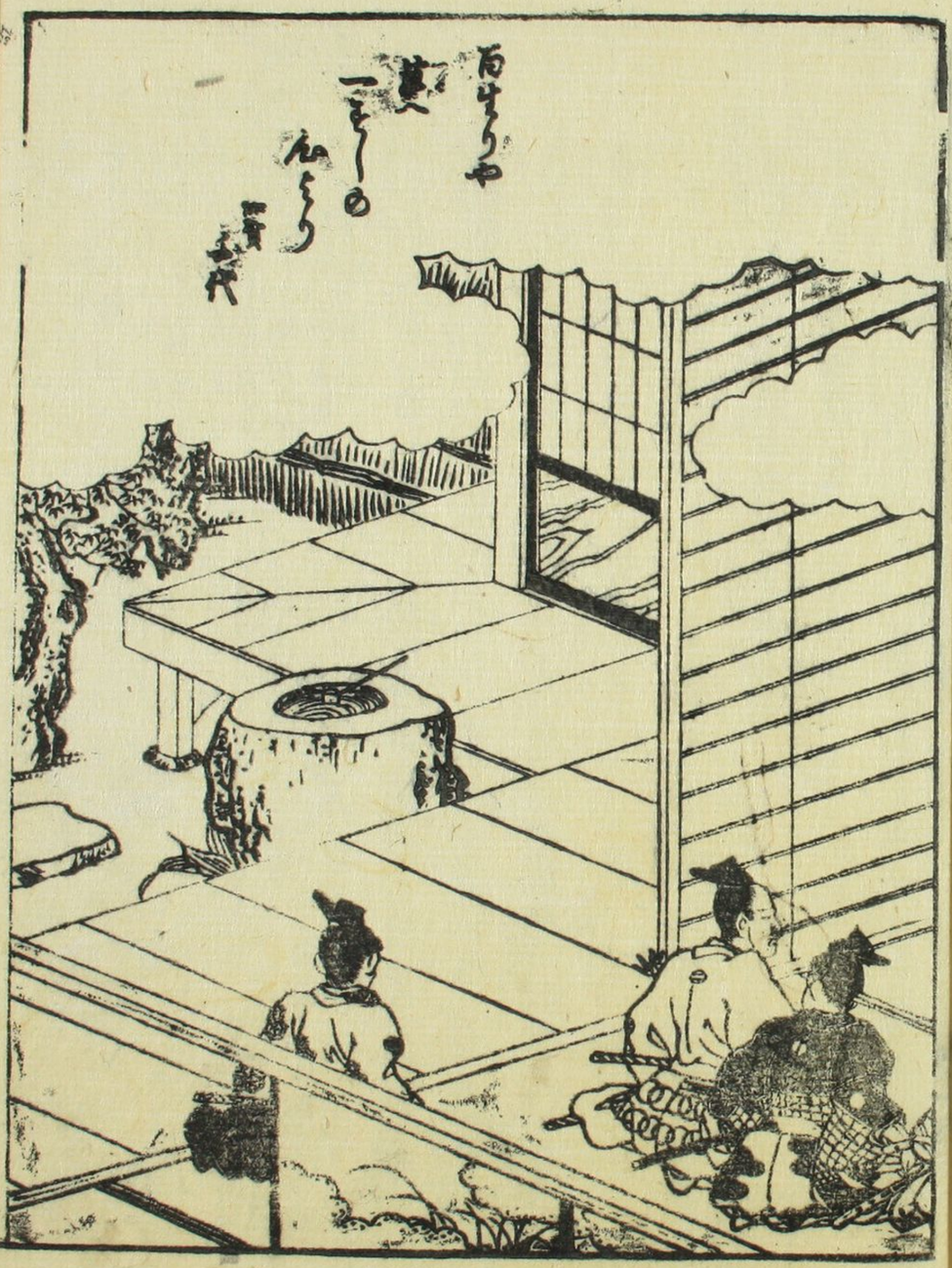
よなきいしハ佐夜中山街道の直中ふあり夜泣石の東を町ばかり
夜泣松の儀ふあり此三角の由来ハ板坂ふして妊婦
妊婦塚
新田の業ふ貴きされをうるなりし昔此さよの中山ふ山賊出て
の女ありし金谷の宿の主ある道ふ衣裳と刈すとも
此婦の日此会ふあるをうけなりし縁を帯て
其子を出し従うすゝりの鬼ある女ふ現し亡婦の魂うり
ありし其ある人の履中ふ佐夜の中山と書て鬼ふ名をのび
めぐりゝ命ふ池田の宿の盗賊の敵ふ出合ひ親の敵が
中りゝと對しゝとなく其盤詳なしゝ
周是くらしく事さりをき

菊川

菊川宿

中御門宗行つゐに其父の
乱れふ強盗を捕れ
東ふ下りぬ附け菊川ふ
宿を菊れの下流ゐ
数ゐ延ゐし菊川の岩窠
命を滅とゐつゐ対句を
あの陳ふ書遺れ
―中略―
ゐの晋の厚そう外聞
信ぶく三郎ゐ
殺ぢ―
比ぢん小

浪速春来画



百生りや
莫
一生の
ん
代

子育観音　小松峠ふもとより久米寺とい
ふまでの間左右に石地蔵尊像正観音正
の像其外大小数百体あり其大なるは
六七尺小なるは一尺許なり
天正十八年小田原攻の時山内對馬守一豊此
陣初将軍家秀忠公御着陣ありし
地なり
九年山石表松建るとぞ
四郡橋　久米寺のまへより川上に架
菊川　菊川村より川上に架
東海日日　十三日甲午於遠江國菊川宿佐々木三郎盛綱
指副小刀於鮭楚割居敷　以子息小童送進御宿
甲云只今削之令食之處氣味頗懇切早可聞食
歟云　殊御自愛彼折敷被染御自筆日
まちえるくの形さまざまあるべし
兼久紀元　兼久二年七月中御門蔵中納言宗行小山新左衛門尉具
てありけるが遠江の菊河宿ふ着のふ夜をば仍ぎと向ふと菊のとう
すまるまへき　則おふ流るぐうえん俊ともえしば硯左歩く宿の柱ふ書はあのふ

昔南陽縣之菊水汲下流延齢
今東海道之菊川宿西岸一丘命
光明紀　菊川と云所ありさうふし兼久二年七月中御門蔵中納言宗行
罪有て吾妻へ下られけるが此菊川水下流を汲て齢延のふ今ハ東海道
小山宿ふ泊りけるが宿の女房ふ
命ばうとてやある家ふ除子ふ書れけるハ
ふそその家と云ふに火のあるふ座ひてうれてこれを飲てねうしてふ
者あり今ハのかぎりとくのあるとさうん形見ふ法うく成ふ
ふるくはるみれせのみくひいとくあふくまで
書はくる形見を今ぞうる事あとふみくまで
胡馬北風之紀　胡馬ぶ北ぼれくる日鳥翅さぐり
菊川の者ふ告ねる成家のそくふ
書付られさり彼菊陽縣の菊水下流ふ汲ぐ齢をのべ東海道の
菊の西岸ふやどりて今を今くせんとふとにあられまそおぐ

甚身も累葉乃賢枝に生れ其官は黄門の高き階に昇る雲の上
の月花の冠のかゝやき仙洞の花の下に蜀錦の袖の色はまさる
我に身さへ栄分にあまりて時としてれ匂ひし人々それをうらやまざ
しもちろんもさうざひ遠きもあびきしもろ／＼の者むかへんとぞ見ゆる
べきさそもあさましや去る承久三年中旬天下風あれて海内
の浪さかまき闘乱の乱将や花城よりこぞれ合戦の武士と夷
国より叛の暴雷雲に害して日月光はかくされ軍画凶を
うごかして弓鈸威をふるふ　下界

此旅あれとさ栄えありしと名も紀の世とめさるゝまでの旅人

承久乱後基朝臣
後基朝臣再び関東下向ありし時宿の名は問へば菊川と書ふ
承久は軍に光親は院宣書あひし罪によりて関東へ召くだされ此宿にて
昔南陽縣菊水とふ四句は書きたりし事思ひ出て遠きむかしみ
其跡今は我身の上よりあはれやいとゞ悩さるらん一首の歌を宿の柱に書付る

いにしへもかゝるためしを菊川の同じ流に身をや沈めん　後基朝臣

桜ちに東鑑に院宣は書きし光親卿されども菊川にて四句は書かる
中納言宗行卿なり光親の記に菊川の家
焼ると書しは兼久三年より廿二年後の事にて是非と定むべき事も
白の事書しは紀の三年の後之承久勘考して見よ

菊阪　菊川村より坂あり坂路十六町左の方
男鹿村に菊形の名石あり

牧原　初めは後諏訪原といふ天正の比より牧原と改む
牧原にあり此城は
諏訪原古城
武田家の臣某尚番の武人籠城しける天正元年武田左馬助信豊馬場美濃守築之
小泉隼人忠次は同年七月後攻落よりて攻らる武人よく
防ぎ降しは同八月廿四日松平周防守忠次と首將として
戸田左門大津土佐門などはりて働きて賀小泉
ちらし勝し城を出て同國小山の城に籠る
周防守忠次を城番として番せられけど要害
固にて名を得ても籠り人ふようし文は攻人ふ
まるべしと御陣を山の奥の儀に見えたり今金谷の
驛より無間山への道筋にしてある曠野之
野の広さ誓ひ是里許の地
天守の蹟など残然とり

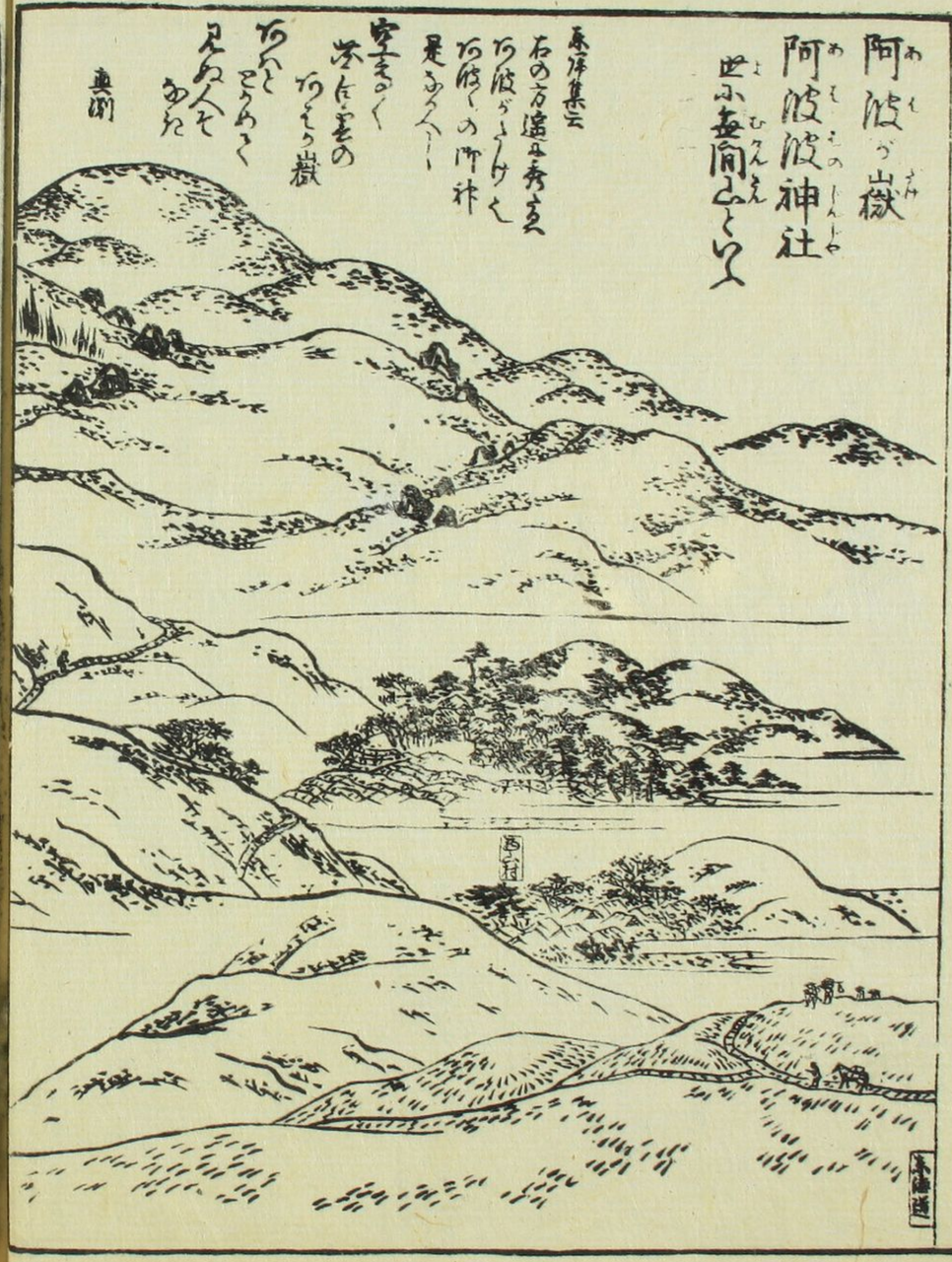
初倉山　金谷坂の上方は山の南の方に初倉里あり金谷坂を
下りの坂路にして嶮しく峠より金谷の驛大井川
の流は見るべし冨士山など遥に見えて
風景の佳境なり

阿波の嶽
阿波波神社
世ふ毎ふくて

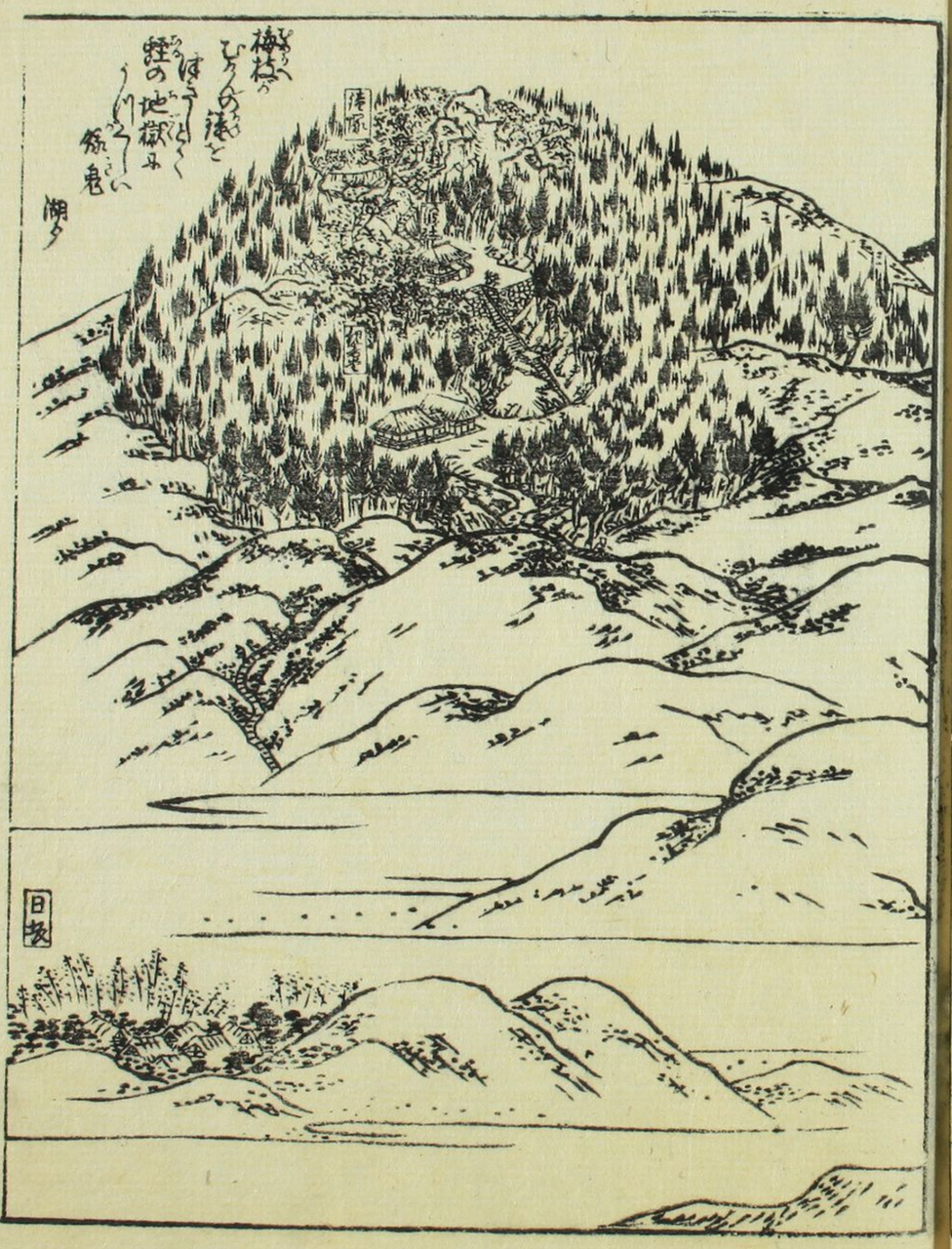
奥洋集云
右の方遠き秀ある
阿波ぐらけく
阿波くの阿祢
是あくへ

空きのく
茶白きの
あくそう嶽
あくとうあく
是あくへ
あた

真洲



梅花の
ひろの浦と
ほうとく
経の地獄ふ
うりうい
鬼



淡嶽 遠江佐野郡西山村の北にあり 二里許 又山より海邊迄 二里半 金谷驛へ一里 總て五里半 杉の村立 蒼々として 奈須なをしき山也

阿波波神社 同國佐野郡無間山觀音寺 同國久野村可睡齋の末寺 此寺の傍に社あり 祭神未考

本尊千手觀音 長三尺許 作者未詳 西國三十三所の觀音の像に似たり 堂舍庫裏等大破して住僧もなく 麁末の居なり 毎年二月初午の日 法會あり 近鄕の男女群集す

半鐘 銘 仏像彫像を堂の傍側に納む 遠州濱松庄宇布見長寶寺 勸進檀那阿闍梨去欽叓祖舜忌 永和二年丙辰二月十五日 鑄工 駿州廬原の山伏荷葉云々 多く高圓長空なる 圖畫を其時我等拂ひ與へ勝一 又一說に無間の鐘の明應の古舟の底へ投落しを今も其古舟へ納めを逆ふ投入れられ 引揚んとすれども 引揚ること能はず 又一說に無間の鐘の明應の古舟の底へ投落しを今も其古舟へ納めを逆ふ投入れられ 引揚んとすれども 引揚ること能はず

遠江金谷 大井川の河原通ふしてより 石徑多くして 嶋田まで三里 此間人家なし 是非とも紙幣を用ゆべし

敷滿神社 遠州秦原郡谷口村川下にあり 延喜式云名神大社 今川中將義元殿天文年中修造 或は大堰の又は大堤の 水源の佐州の山谷より 藻掛神 おびただしく敷滿あまされ大井川を大井の川下へ三里 俗に大井川の名ありて 遠き初會の山 元寇

乃ち日蔭川にて 幸ひ

守しをちなりひくワ川しひかしかたるいくまとなやいとえる
あらのいそたらんおもかけをしえらち侍

おもひ出る都のことをおほゐ川いく瀬の石のかすもかそへし　阿佛

東関紀行
おしうちのほとりあたり奥より大井川を見わたしたれは
はるくと廣き河原の中に一すちならぬ流れ別れたれは
河瀬とも見えす入ちかひたるに打わたりける中くさらにて見えんより
もよ秋なおのし旅く覺ゆるのもみぢ見ると旅くなりけれん
龍田河のもみぢも思ひしやすられ

後基あかり
日数ふる旅のあはれは大井川わたる水もふかき色なる

大堰河のとまりむかし都にありし名におなし亀山殿の行幸の嵐の
山の花盛り龍頭鷁首の船に乗詩歌管絃の宴に侍し事も
今は再ひ見ん事の難さは嵐ねとおもひはれけるかな　光行

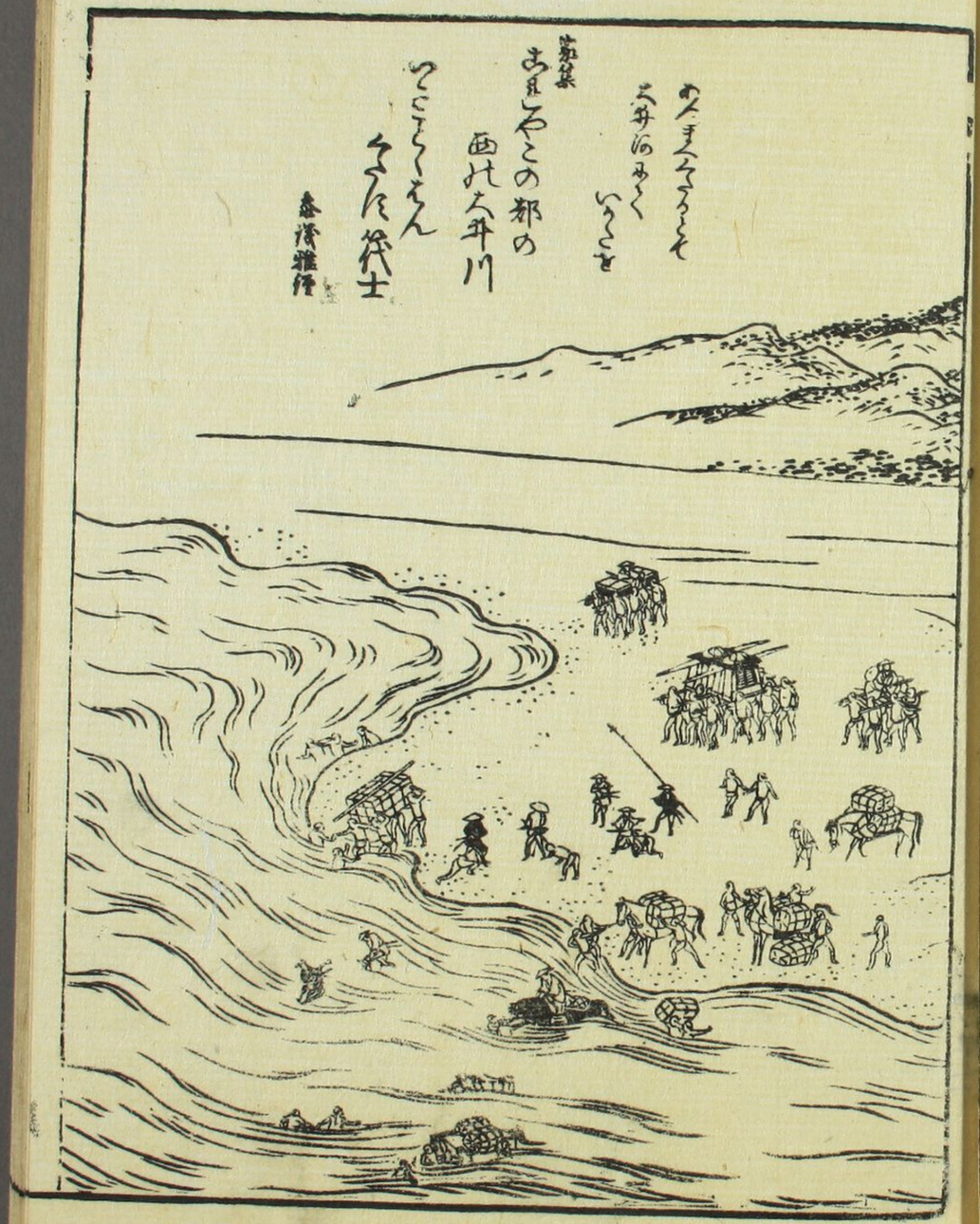
東武紀行
瀬々の潮にかよひてもそこ大井河人の心の底もしられし　澤庵和尚

駿遠兩國堺　大井河の半ハ遠州半ハ駿州也近ゝ下流西の方へ遠く
丙辰紀行
大堰河は駿河と遠江との堺也明日香川ならぬ舟と霖雨ふれは瀬々の
ふちもたひくなれは東は山の岸に流れて嶋田の驛の河原の中にあゝ事も
あり西のかたに流る金谷は山に添ふ事もあり又一すちの大河となりて大木
沙石の流る事もありあまたの枝流となりて一里ばかりの間にいくつの事
となりされば沙に歩して渡り徒杜輿梁もなりがたき所也往来の人馬河の
瀬をわたされ金谷に待もあり嶋田にとゞまるもあり渉りかねて溺るゝ者
もあり幸ひにして向ひの岸に至るもあり嶋田金谷の民おのが家をたのむひ渉る
れども旅客の嚢をむさぼる也へに洪水を悦ふ賣炭翁が卓夜ふして牛の寒を
待がごとし河水は家の流し田を損ふゆへに防鴨河使防葛野河使の
垂れしむかし事も口いておもひ出されんや

○尋常掲厲心過腰叱馬呼奴魂欲銷
來往就中何處苦無舟無筏復無橋
○海道奔流第一川鑑輿舁載擔夫肩
洛西大井雖同稱此不看彼有船　羅山

大井川

大井川みそめ
松と方や
石万石成
流の上
瀬々



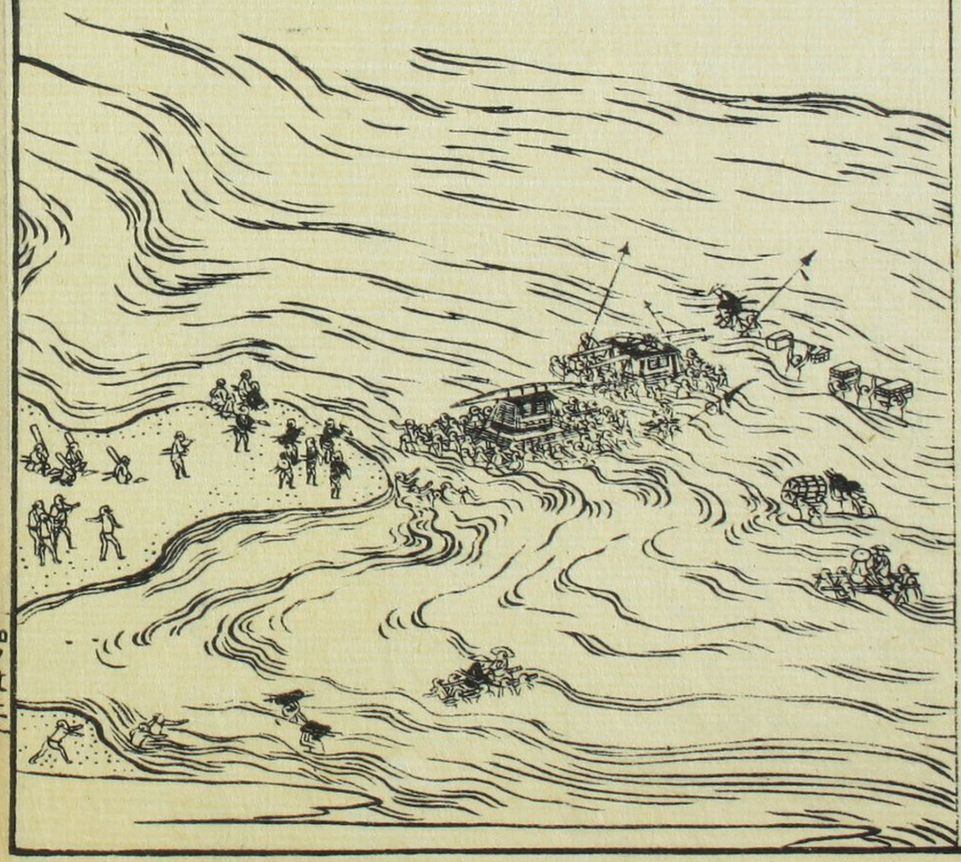
のぶまろそうそそ
大井河のみく
いうことを

第伯集
あれこやこの都の
西北大井川
ひこそうそうそん
そうた武士

春澤雅行

大井川渡之圖

旅客馮陵慎渉過
横天湍瀬急頽波
水光倒走中山樹
石勢轟流大堰川
夾口年年沈白馬
防堤處處臥蒼牲
早知夏后行無事
安得成功濟世多



乙卯仲夏從東關
歸路憩鳴田驛長
大久保氏家主人指慶
大井川渡下其芳志
殆厚矣

光くらむ
あの上り
蛍かな

蘿岑

きれを航大堰川を東海道第一の急流なりとて薫風やゝみかさ水
浦〳〵穴吹ぬれば名ある つゝみ舟多く掛ならべ橋無ふしてゆきて
九人を鳴田金谷九川越所ふ左に富て伊勢まいり宮
到着ふろ〳〵渡下ふ越さうむ運送商車をとゞめ荷おろして交易の賈人
京也吾妻つゝみ伊勢まいり富士俗あり八人餐の姿ふ赤られ又い肩
車ふ〳〵海をとあり棚模れ関取の人と雇ひ自身裸ふ成て土俵入のまく
つるもあり水物ちか〳〵少々芳きん彼を左右へ別れる郷相の雲客烈
國の諸侯の駕ふ基ふ居てをくれ役夫ふりて舞渡ふ水堰の備まいお渡
ふ圍ひ急流ふ足ふ拭〳〵聲ふ合〳〵勝ふ紅葉もり時雨るふいあり落て
安川の寂〳〵ふ渡下ふ弱まみうさ海を裏ふと質ふ入〳〵りれ渡
羅山子いくるまく已ぐ茶の声ハ流れも尚よけの情緒を助〳〵て
六月雨の水ふ威を添〳〵り酒の荒ふ辞く所ふ裏ふ鳴田金谷の渡下都
二七百人七霖雨降止んでそみうさはら〳〵ねどだの止ずく東西ふ驛中所

せくまでふてうり一驛二宿も踏へ戻りて水れ落ちを待もあり又急雨
海まて義枝へ歩もあり多ふ此所先ふ安部川富士川洒匂馬入六
郷なでふ川々ありみるまれふ雅べ〳〵雅南子ふ水神ふ天晏ふふ
又水伯ともふむ〳〵ふ此所ふ至て接遁まふ急事れ旅人もまれらの
紳の機嫌ふ獻〳〵あるさ事ふ多ふべ〳〵 後白河法皇の御嗣平
鴨河の水と雙六の塞〳〵ふ朕が意ふ成ぬらばと仰せられ
〳〵も同日の論〳〵ぞさられる

藤枝すぐ〳〵武里八町ふ宿ふ大井明神〳〵ふ所の生土神あり例来
九月十五日ふあり在村ふ所〳〵
風雨頻ニ来テ宿ス嶋田ニ家一園万一里思茫然
通宵漏一却ス郭ニ燭ノ滴リ坐ノ到テ天明ニ不ル作ル賦ヲ

嶋田驛 河

山岸闇齋

末起行

蔦田ふるふ婦が家ふはくしうれ茶を打て花撒ふちを

岩はし〳〵まこうほ渡ふ初ふ花を打そゝぐ 冷泉為村

瀬戸 洛田より壱里許先ふあり名勝ふ志太郡〳〵ふ在ふさの川と書して益頭郡ふ入る
今ふ瀬戸山といふ又は瀬戸川〳〵ひ川岩の山
なが流れを堂あり

富士紀行

うつゝ尾花の浪ゆくえも

名物凉飯

瀬ヶ村の茶店にて

招ぐゝ小判形ふたつ

岡部まで三里九町 山驛中 左側に志太郡右側に益頭郡と

新驛 此宿鮮魚多し

藤枝 駿河

家集

妻をまつ門みなさびたれもみぢ

富士紀行

妻ごゝろ花も白ゝん秋ぐさに

藤枝

青、薜蘿恰好迷 藤枝村一種數五、猶

家家不レ解二閑人意一 春一杵聲忙 八月秋 闇齊

田中城

藤枝の南二十町餘ふたつの

信蕃 天正八年の冬甲州 依田と 右海門嗣

依田 依田ちゝ 依田つゝ 依田を依田ちゝ つゝ 甲州み 支せび 同年五月三日遠州 攻られ 同九年 二月二十日又攻られ 慶長六年 酒井 松平忠利

岩頼同十五年より 所番城と 感寛永九年 ゝ

蓮生寺

藤枝より 綜指東本願寺派 宗祖親鸞聖人 東國経回の

時ゝ 寺號云 無谷次郎遠國實 遠陽山に登り 併に入れ 十念 伊豆の走湯 山に登り 併に入れ 十念 上洛して黒谷の法然上人の弟子と 故々無谷へ 藤枝の驛 其夜蓮生法師宿のあるじに云られ 故郷へ 念佛十遍 附 蓮生 十蓮 失る 賜 腸 生 念佛 一遍 不 念佛 一遍 上洛 家 寺 帰入 蓮生寺 蓮生 一生記 西 八幡 村 蓮生 回 蓮生寺まで 岡部 宿の 西 弥太 の 生土神

岡部 駿河

新拾遺

家集

建長六年 あづまくだりの時 岡部にて

手枕名所

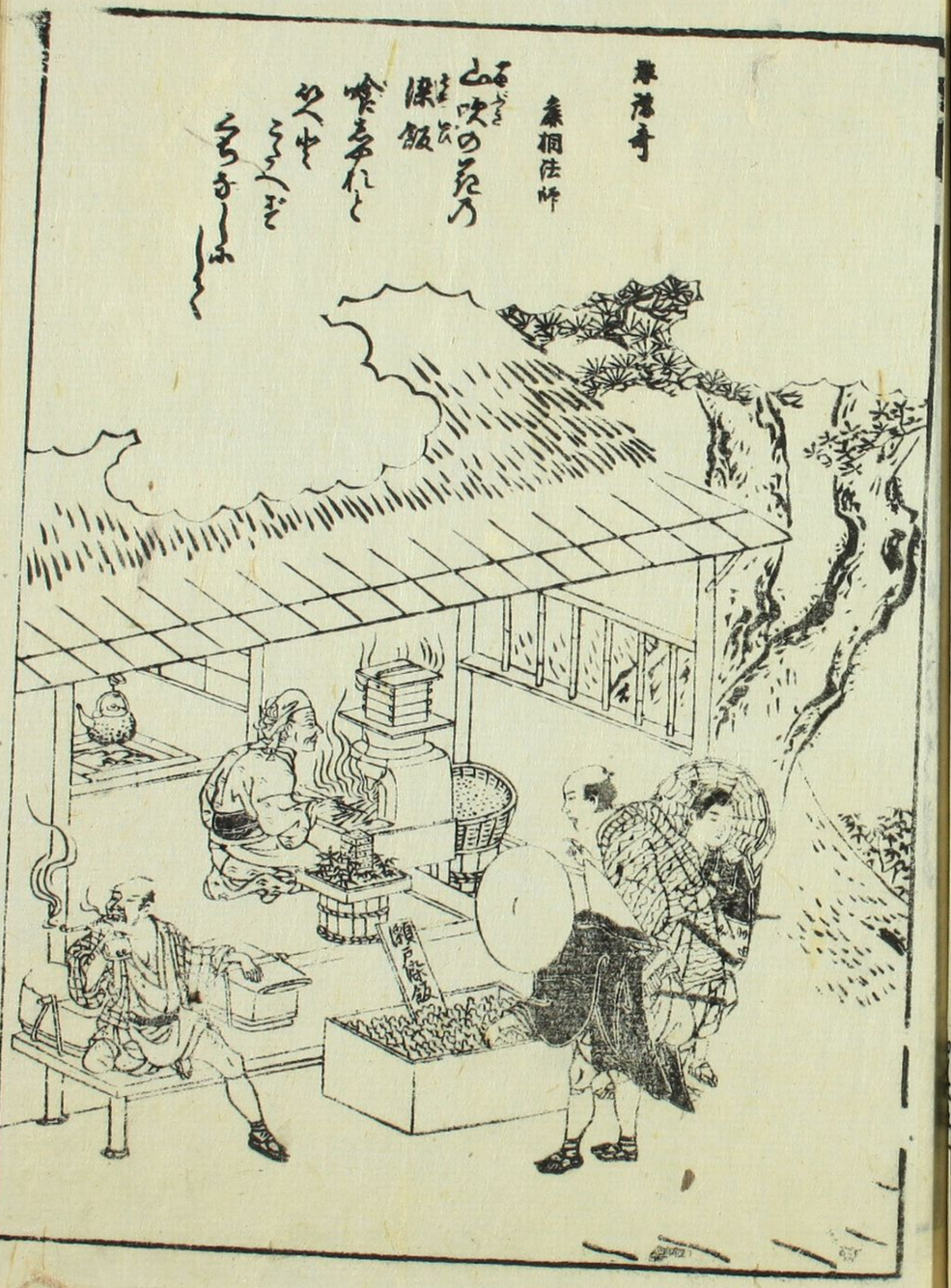
海上百首

法印定圓

従二位權大納言藤原

参議雅経

名産 瀬戸深飯



那賀郡の山々より流れ出るほくかさ山は松のうげみありてうつくしう
さう生ふる小嵐すさは一しくもうつくしふひ花てうつくしう夏は青
葉こんもりすさたるもうつくしくおもふ
されてこの末の末はかりこそ田ある松はあれよとよくてそ

岡部の里に櫻一本咲てうつくしん

おさ高はれをのくうたうと一をとよ松はてうつくしん

那賀神社 延喜式内 今土人 虚空蔵 ～称ん

宇津山 岡部の北 宇津の谷嶺 ～十石坂口より坂路くねれをうみの上
郡ふ属ん十石坂ふ西行山最拔寺といふあり西行の妻子の住
千手観音坐 又宇ばの谷ふ石川氏といふ猪あり
禮太内小田原攻の時御勘勘功ありしよりて
領ん今ふ傳ふ ～家宝
蔦細道 宇ばの山ふあり海道より細道ありて古の
所の者 ～称ん 業 ～ 偏ひくく ～ 拔道 ～ 河
業所の者 ～ 人 業 ～ 称ん 郷ふ入くく ～ 業 ～ 称ん
通を分る業 ～ 郷 ～ 中ふ險路 ～ 称ん

支宇津山蔦細道より坂路ふかくくいふ
ようまくに至るふは岡部より藤ようまて海道より里許あり
所おりこは鼻取地蔵堂の向ふの細道
ようの道細くいさゝかの溪川のうち流
坂路ふかれてくくの道細くふかくて
生茂りて夜晝蕪荊棘袂を閉くく歩しかく
二人のよしの衣縁にくく最と薙刈くく次第ふ
杖をちこちふりふりしたくく所あり
一古蹟へしと教ゆ指ふる駿河の国土記ふ宇津谷本原神社い
仁徳天皇紀七年乙卯所祭やえ ～ 称ん
現在六帖
神社の古跡かくんう古ふ
とふさくうほの社ふ現ふとふ
其上の方に猫石とふおり古松六七株ふ猫ふ卧る形ふ似る巨巖あ
それとう又ふるに御頂嶺とふ所ふ歩とう山郭依々として伐木ふ

壹丁ばかりのぼれども田家あり。實に陶潜が桃花源に至るの佛あり。このさきより
東に降る阪路はなはだ嶮しく、且真砂地にして踏止がたく、すべりやすく
静にくだるべし。さだかなる所へ出れば、又溪川あり、さゝやかにも砥の橋あり。路も狭
くして段々下る所に、廣し宇津谷嶺の東なる十團子の名物の茶店あり。傍
なる橋といふ。此橋の東爪に出づる。是本海道と初めの湯谷口より
此所まで道法壹里に足らずとぞいへり。これ蔦細道といふ

伊勢物語云
ゆきゆきて駿河の国にいたりぬ。宇津の山にいたりて、我がいらんとする道は
いとくらう細きに、つたかえでは茂り、物心ぼそく、すゞろなるめを見ることゝ思ふに
修行者あひたり。かゝる道はいかでかいまするといふを見
れば、見し人なりけり。京に、その人の御もとにとて、文かきてつく

新古今　業平朝臣
するがなるうつの山べのうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり

玄旨云　古註に此まりの事、僧正遍照なりといへり。遍照なる人も然るべき便宜
なかるべし。うしも業平も人に逢ぬなりとらへいふはあるまじき所なるべし
あはし　後しと俊成卿も此中に…
寂蓮　しのびしと明り

新古今
旅寝する夢路はゆるせうつの山関とはきかずもる人もなし　家隆朝臣
詩とあるにむかひ行ふ山路秋のわりとのみうつゝとなど

同
都にも今や衣をうつの山夕霜はらふ蔦の下みち　定家

同
袖にも月かゝれとや蔦楓しぐれをうつの山まで　鴨長明

續古今
旅なれしむかしは夢かうつの山わたりもみぢてくれぬる　参議雅経

玉葉
夢路にも駒ひきかへしうつの山越えし蔦の下の庵　俊成

新千
あしひきの高根の雲をわけてこそ夢ぢも遠しうつの山越　前大納言忠長

新拾遺
尋ぬるに蔦の言づてもかはらぬにいかにうつの山道　法印定円

新後拾
里まではいまだ遠し宇津の山辺も雲に宿やかるまじ　慶運法師

新拾遺
時ぞ文字やゆかんよもきかむ月のかげもなほうつの山越　藤原為景

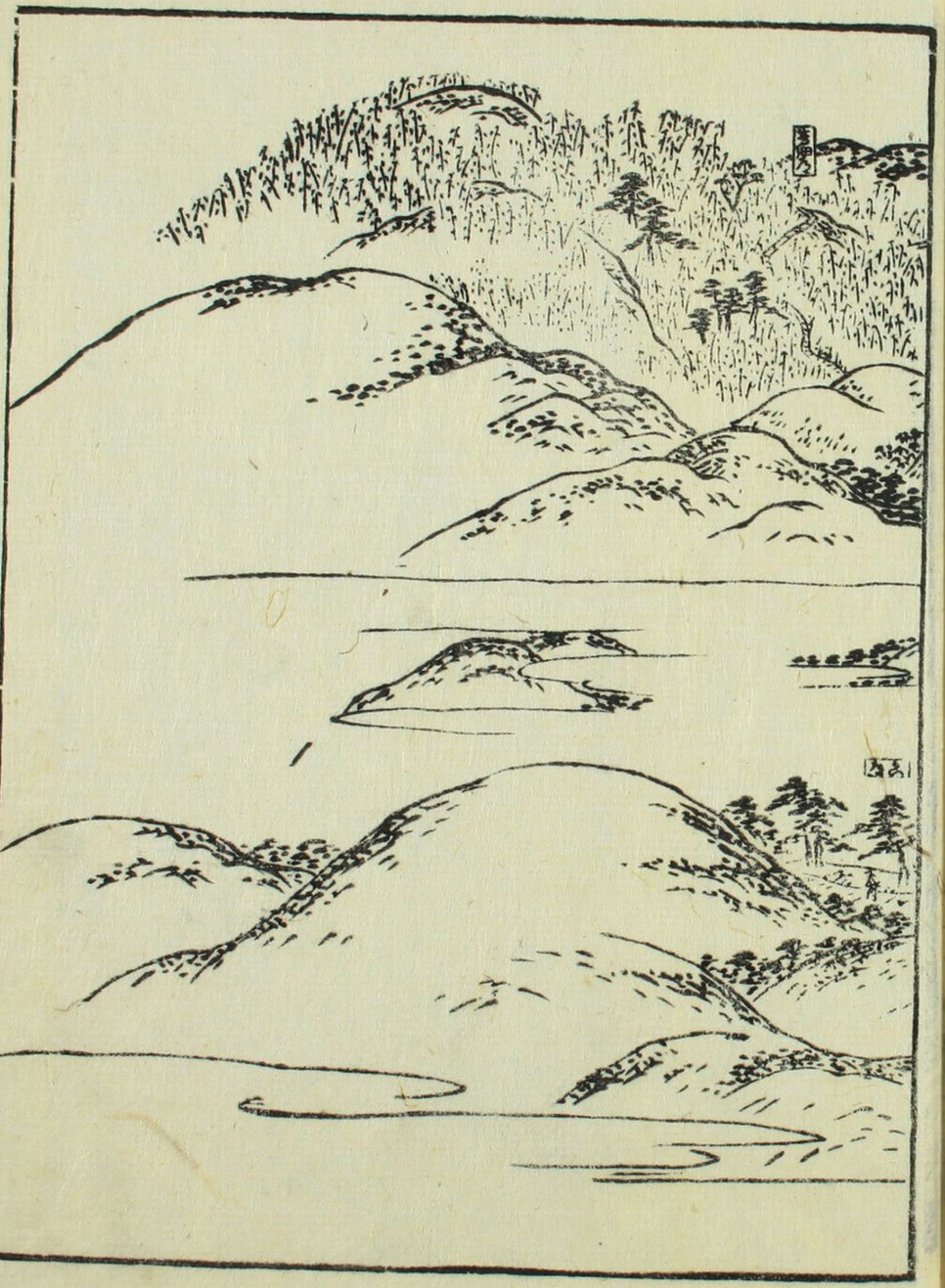
新續古
ただ名のみ富士の山が根こそ仰ぐらめ心をもとへ宇津の山と分しむなしく

宇津の山とよそに見るまでと
着きにむかひしうつの山越えて蔦が下に宿れ　権中納言雅世

同
夕ぐれのさびしき蔦は今もうつの山道　俊成女

同
都どりかひなき神無月にはこれうつの中山　従三位為實

宇津の谷と蔦細路



宗尊王
うはの山遊覧

玉葉
たびごろも
着なし猟も
おもしろ
ふりはえある
うはの山かな
中務宗尊親王

清涼殿名所歌
うつの山しげる緑の若楓さらに秋なき蔦のかよひぢ　侍従

實材集
信生法師うつのやまをこえ侍るに川の山はある歌を書つけて侍る後都にかへりて
侍りけるかの歌のかへしとて
うつの山現にゆくきえてこえん夢とさへ跡をかへりみん　信生法師

新玉
旅ねする夢もむかしのあとたえてうつの山守
宇津の山守　家隆

建保百首
宇津の山こえしむかしの跡ふりて蔦のかれ葉に秋風ぞ吹く　侍従
宇津の山ふるき跡とてたどりゆく蔦の細道　信定

同
侍従は夏も秋もわかぬうつの山蔦の下道

家集
ちるはなの波にうつろふ宇津の山　為相

十六夜日記
うつの山こゆるほとにしもあさり侍るに山ぶしにあひたり
夢にも人をといひやらまほしくことにしてつくめにつ
つなかへしくらをたのみて
蔦楓しぐれぬひまもうつの山なみだに袖の色ぞこがるる

東紀行
うつの山とこそ聞しに今は宇津の山とて旅人の行かふ
みれば草木もむかしにかはらず
ゆふしもはらふ蔦の下道　中納言為相
為相卿のうつの山の蔦の細道を今は海道にかはりて
あるといふに道かはりたるに宇津の谷の余所に
みれば蔦の細道のかたはらに
ふる道をたづねてわけ入る
うつの山をこえしに蔦のしげりて昼もくらくあはれなり
者に行くかへるとみゆるにたよりのなきこそ
うつくしからぬ無縁の菩提人のやうにもてなされぬ
立入るべき道をもとめぬ
修行者の心なる浄土の法文をもて其外に更に物なし
發心のもとの身をはなれて此国の者に心して思ひしれる
道をも行ずるかはりの身なるべき理を観ずるにかなしくは
と念ずるに性物甚し難行易行の二の道ともにかけりといへども

山中ふ籠ふまるに里おあてはるかるに越人の教
法紀て此山ふ庵と結びはく教多比年月を送るの一をこゝろ
菅叔齊が首陽の空ふ入一猶こゝ裏比ひとまる許由が讀水の
月ふまそ一とうづら一飄比器をかきうりといくまひいほりれおう
ふ珠多ふりたてるあてがとふくび紫ありふぐるあくさあやうくも
ら比本くたるさ逸ありり身を孤山ふあ一比こにやどりて仏祝
淨域比雲の外ふまぎせるのどもふくくるゞ表ふ仏祝一
世祝いとふ仏れおくやまっくれすまー仏山をの住家ふては　光行
此庵乃あとう茅招遠うくし峠とつふるふ卒加藤老ふ年
経ふけふとこゝ移るふ奇どもおまこ史付こる中ふ〈章書後の
さくとちにせんう川比山あそれも海一ほこの細道とふるん
とゆりて覚ふ其像ふ書付一
つれを又宴祝せふ勝ん宇津の山ワさてあるまの下森　光行

窓紹の里邑祝ふあるうふ遊けを宇都の山ふかる此山を山中に
山祝ふもる巧比まづうの名ふ山之陽岩岸比下に砂ふくして叢をたて
翠嶺比上ふ葉藤くし壊をほく脱を資ふ負面祝胸ふいごうて酔ふ
のがれば汗扇袖比膚ふぐし一草衣うさぬとくくも腋中乃
扇を動一て微風の枝持可ふ斯ふ森々ふる林祝とけて孤々たる
峯祝就比ふ貴名の蒼ふ比山ふ高一大うこをちこちけ本ふふ一ふ後を
つゆらふて一方ふらぬ感望ふ西ひこでれ一これ朝雲ふ一
虎李將軍が栖祝さふ暮風谷寒一龍鄙太尉が蹟ふとも院ふ
一て赤羽西ふ少びはふこふさくぶる物一てを拉原槇比栗老乃
ちうふ一祝疲れとう足ふまる仏ふるふの若比学動比下道嶮難ふた
つ比皆うち屋を先び修行者一夜宿借ふてをそたてこう又供て
又うくれうはの山畑一こ比てよ都ふひまく旅うこそこ
行くありくをまぞるふぬるけわひさ比山河ふ夢ふ見はふうつふろろ

吐月とやいはんもまたよしや今宵

曙こと

生死涅槃猶如昨夢とやいはれもあわれしそおもひ

今日は山路いそぐ雲水

家集

曙記

都は華を夏にしてうは

古今の夢をおもひ

秋屏風と劉禹錫

なそと江の桐公はいひ

をうとみ

兄をうしよ

末紀ノ故殿ゆくさ

通し侯日本

めくし

内辰紀ノ

左原業

山中 囲ン首 費ス吟 呻ー遺 愛 蔦ー楓 秋 又 春

ヰー古 冥ー々ノ名 照レ境 業 平 詞ー後 更 無ス人

十壺子も小 羅山

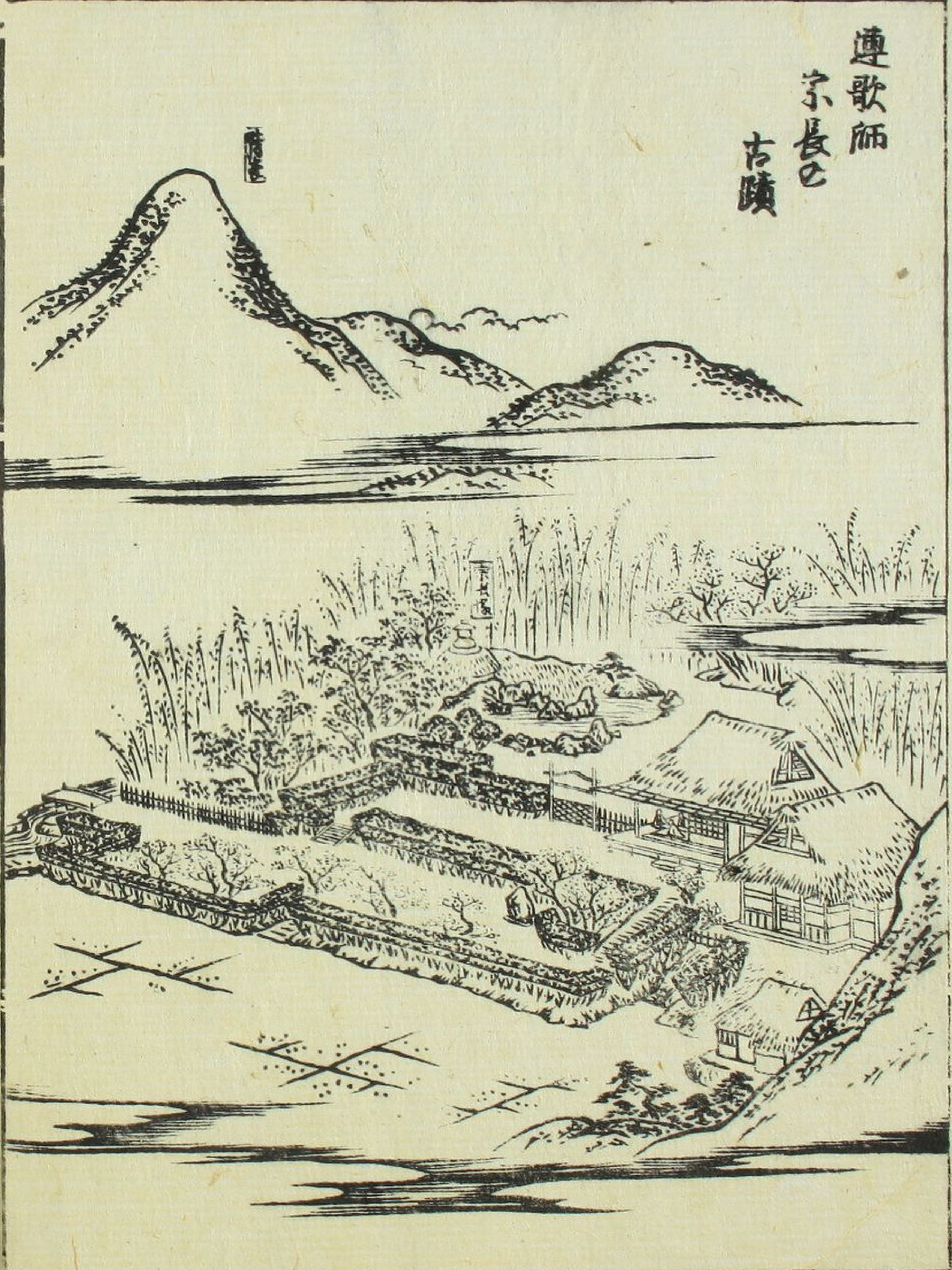
むくさ

岩 鼻や 小 妻

光くる日ふ照らし

細竹や 等の

みどう



丸子 駿河

駿府まで二里半　東鑑に云文治五年十月手越平太鎌倉に於て
丸子所を驛舎にせん事を願ふ頼朝公許して散位親能に命じ
泊屋を沽人に宛行して驛舎とす此所に誓願寺といふ禅刹あり
後奈良院の勅願所也

河水落るとまり川はしと丸子にかゝる流れ享保の御り
故殿作下向にも河水ましてすでに止宿せり

思ひきや君かる宿りあまたに侍らて志ろふ雨のはれしく　冷泉為村卿

名産盆山石　丸子の名産にして市店に出して沽之又薯蕷汁
鞠子驛の名物にて名高し

梅若菜丸子の宿のとろゝ汁　芭蕉

わかくしい者にあたりし名物とろゝ汁と出し
されば此とろゝじるを句のよまく能く知らる

ゑんしと游沢ありて猶是花を志る世に来さがるまゝに我ありき　湖十

連歌師宗長古蹟

丸子の西口六町許左の方泉谷にあり天柱山柴屋寺といふ禅刹にして宗長の柴屋軒といふ故に寺の名とせり

柴屋軒宗長法師ハ後花園院御宇文安五年駿州島田邑にて誕生
幼して叡智たり国主今川上総介義忠これを愛して左右に近仕せる事
三年十六歳にして上洛し宗祇法師に謁して連歌を学び世に鳴る十八
歳にして薙髪し醍醐普捨院にて灌頂を遂紫野一休和尚の禅扉を

故く四大本來室を始め大徳寺の山門再興に力を竭し縁を慕ふて風雅に
逍遥し諸國に遊ぶ明應四年宗祇法師に　勅ありて新筑波集を撰ひ其
中に宗長が吟二十八句あり永正九年今川氏親の招請により泉谷に
卜居し庵を結び自柴屋軒と號し風流を事として常に一節切を
籟て老の寢に閑居幽邃にして西の方に天柱峯聳へ東の方に吐月嶺
の清輝鮮にして庭中に水を湛へられと七星池といふ曾て庭前の風
色宗長の好みにして庭造の法を洩さず老松枝垂て乱の音濃
やり永正元年初て此廬に住むに附

山櫻　あのふ匂ふにかすこの邦　宗長

終に享祿五年壬辰三月六日八十五歳にして志ゆに寂く寺に墳あり近隣
の騷人懐舊の為に石を備へて建る事多し書院に什寶あり宗長
持念の大悲の尊像人麿の画飛鳥蘆屋釜一節切是を銘を残夢
とよぶ連歌百韻同新式偈に宗長の自筆同影像やら狩野秀
信の筆宗祇法師の影ハ春山百助成昭の筆なされど皆ゆ〻しき風雅の
名蹟なれど因ていへ旅人道を枉て古人の墓を拜し英風を欽し嘆息の
少もうらも多かりし

嘯月亭　藥品川の支流佐渡川とてあり此橋の西より左へ入れハ小野
藥師堂あり此寺の書院を嘯月亭といふ富士山座中に
見へて鮮也又安部川の流あり
風流直ハ妙の趣あり

手越古驛　丸子川の西岸にして東鑑平家物語などに出る
手越ハ古驛にしてあり しく

遺古

おくあハ中海もまよふてまゆちる手越が濱と出る白浪　九条前内大臣

富士紀行

旅人は手越河原の駒も足あきいそぐ執立　堯孝法印

手越家遺蹟　手越にありといふむかし中將重衡囚れて鎌倉にわたされ
此手越の長者が娘千手が從に伽に付られし又其娘の千手が
愛せし中將といふ妓もありしとかや
平家物語に云しげひら
中將重衡守護の武士に宣ひけるハ今の女房ハ優なり
けるとのかなる名とはなといひて申ければ是ハ手越の長者の娘にて候
手越の長者が娘を候が眉目姿心様も優にワりならざるので此

二三箇年い依屓ふ召具れ〳〵作名すば千歳あく申も此夕アア雨
おー依てう筑川物寂〳〵げる折芦千夢琵琶琴を持せて奏うう中里
角て夜も漸更〳〵分れまむまくれた邪思いまや吾妻ふもかく優
る人の有久るよ其行事あても今一聲と宣へば女まあ系子て一樹の
陰ふ寄り並同〳〵流し狐結ぶも猶是先の受け装といふ白梅ふ狐
城ふ面向う舷ふうう久れで三位中将も燈園〳〵てい救汐 盧氏が
涙といふ朗旅狐投せ〳〵れ久る中暑甚後中将南部へ波されく斬れ
ゆ人ぬく聞へ〳〵うで千ゆおい弟〳〵物ふひれ柱とや威ふ九驚て
様をか〳〵濃墨深ふ窶れ果て信濃園若光寺ふ汐ひ澄〳〵ゆ

手越の原合戦 建武二年十二月新田義貞矢矧警坂の戦ひ打勝
午の年れ始うう西のかりまで十七夜まで〳〵無火狐焼初めの月雲ふ隠れく狐
味方芸ふ人馬狐休光に狐魚〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵
陣〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵

後受け菩提と弔ひ久る我あ〳〵れ狐う

十古枯杜 安部川の上薬師川の中ふ八幡宮立せ申
頼朝卿の御歌 森あ〳〵ま〳〵〳〵の森

新古今 清信ぬう川狐ふ人の秋け逆ふ身をこがし杜け下葉 定家
雑部 秋け逆狐そらふとうたて風の杜け狐を雪もたまら
新後拾 人ふれぬ心自もそるれ園ふま狐身をこがし乍葉をこがれ 慶人法
新続古 け須山ふ雪も時雨も狐ぬ狐ぬ狐ぬ狐ぬ狐ぬ狐ぬ狐ぬ狐ぬ 雅永朝臣
今 〳〵ま〳〵今いかう〳〵れ秋の逆狐ふ狐ぬ狐ぬ狐ぬ狐ぬ狐ぬ 為兼門院
拾遺愚抄 ふ〳〵しのとう杜指けあ狐ふ〳〵名ふあ〳〵狐ふ狐ぬ狐ぬ 宣秀
後撰 こがし杜狐う〳〵ふ〳〵風ふ狐ぬ狐ぬ狐ぬ狐ぬ狐ぬ狐ぬ 慶人法師
玉葉別 ふ郭川を渡る西〳〵ふ狐ぬ狐ぬ狐ぬ狐ぬ狐ぬ狐ぬ狐ぬ 後鳥羽院

建穂神社　詳ならず〳〵建穂寺の鎮守なるべし東鑑に見ゆ

瑞祥山建穂寺菩提樹院　行基の建立なり天武帝白鳳十二年始一堂を造立し天平勝寶元年に道昭法師一の閑基を開き西展記り

寺もむかし〳〵役行者の草創せしとぞ

窓家の者移り居〳〵今ふいひはふり中比より

此地元來法界宮水雲心性似虚空　　巒山

吟眸所と不知暮山石徑霜深古寺孤

用宗古城　古括嚢のいにひふあり三浦無邪向井伊賀ちかき當時の虚空藏へ行道あり牧野右馬允康成駿府へ攻給ふを此所にて討奉る

繁山　此所にあり本尊千手觀音大慶山德願寺といふ坂路五町ばかりを

安部川　水源は甲斐の白根といふより二流となり八町許にて一流となる此地安部郡なるゆへ名付駿府の町〳〵貫ぬき二流となり九子の方にて蒙斜川と會合一流となり盆山石の間山野一國師の出誕の所あり

今は後藤藏人屋敷あり近年國師五百年法會を上ぬりとりおこなはれ大井川より引入る水流の末にて駿河の名物なり

駿府　江府より東武里共七町今の府中と和名鈔に云國府は在安倍郡ニ云當城の初は東海道驛路鈴ふるくは

万葉　佐可故要氏阿陪乃田能毛小爲流多豆乃

等毛思吉伎美波安須左倍母我毛

兼盛後にもみてこそ仿るふ馬の蔵一ゆるし給ひ

つれ後はつさせる橋もあさきめのといそぐ乃ふ恋つるごき　源順

兼盛後にもみるべくもあらぬ仿るふ馬の蔵一ゆるし給ひ

清泉え補

つれ後はつさせる橋もあさきめのといそぐ乃ふ恋つるごき　源順

清泉百首

山風ふきたゆむ雲も坂まえくらき夜の

阿陪市　今の府中紙名物の亀細工紙合羽藍玻細工櫛中練茶芝原の海苔盆山石鉢櫛の類其外いろ〳〵あり人多し

寶治百首

さゆとる安陪の田面打むる栗坂まえて帰るくるしき

中務卿親王

山風ふきたゆむ雲も坂まえくらき夜の

侯二位頼氏

阿陪市　今の府中紙名物の亀細工紙合羽藍玻細工櫛中練茶芝原の海苔盆山石鉢櫛の類其外いろ〳〵あり人多し

いとしくなりの市ふもとこそ住むし

後頼朝臣

五百番

よく後をしあくの市人さらぐしも坂をくうら夕くもの雲

民部卿為明

賤機山　府中古城の東北の間社の神山七風土記云青葉岡と号れる

今朝されば霧の衣松をより出そむるも

風雅　　後法性寺入道
　　大納言入道

名ゐるあだ人のそでこそ山ふ春なるふるり

新拾遺　　正二位知家

いつのるふもとげをそ山れ初しくれ染てをおろし綿とるらん

拾玉　　正二位成國

紅葉ちる歳をそ山のさをしうの鹿とそ春ふ紙ふるらん

鷲川百首　　大僧正慈鎮

散しくる志川撰山片をみち葉ふをれる鴛とぞ見

濱間社　撰機山の麓ふあり　例祭四月酉申一日十一月同日

家集　　正二位權大納言藤原爲家

志川そ色ふまさりふ花の神垣ふ春ふ千ふ

祭神木花開耶姫命　左壌々幹尊　右萬機姫命　社内生土神とん

　　源良真

奈古屋祠　本社の例ふあり　祭神大山祇命

　　後水尾院

賤機山もうふふ人ふ代ふ春ふ松風

濱間の新宮ふ延喜年中富士濱間社ふ勸儀を本社二座ふ山の宮ふ檀百四級あり同所ふ山ふ穴ふ日光祕筥一とり濱間祕筥二とれとふ社宮ふ新宮左を勸社

圓山　撰機山の麓ふあり福田寺とふ圓初將軍家ふ御ふ入らせゆひ寺領云々延喜式内大歳神祖神社是ふ

まの高き丸山ちれるれの井筥とふ旅ふりつれ春ふの月

流之井　寺をふあり濱川の清泉ふ

別雷社　府中西の坊ふあり一説ふ風土記ふ記ふ雷の宮ふあり

　　慕景集

祢ふ事や志げそ山のそそぐ旅ふりつれ春ふの月

清水　府中安東村ふあり慶長ふ神ふ勸請ふ寺とふ臨水寺祕ふ祭ふ社ふ傳ふ

　　大田道灌

みふ訪ふ志ふ春ふ

一日ふ接待ふ祭ふ施生の

御花ふの幽艷ふあり

名産阿陪菜　府中の小ふ二里許上ふ方宇治信樂ふ

　　足久保とり歩くふ

名ふ

駿河路や花橘ふ茶の匂ひ

　　くるふ

足久保觀音　足久保村法明寺ふあり此ち曹洞の禪刹ふ本尊ふ觀音ふ本の補ふあり里人ふれふ伐ふ正ふ基七体ふ作ふ補ふ木ふ長ふ一七基ふ斧ふ入ふ血ふ出ふ則補ふ作ふれふとふ基ふ圍ふ巡ふ里人ふ近隣ふ祭ふ

麻撰山　府中ふ小ふ片破ふ補ふ今ふ繁茂ふ詳ふあり今土人濱畑ふ書ふ

一説ふ相模圍ふ

名寄 夜ともに行かふ山によるを都のみちは跡もなし　読人しらず

焼津神社　府中の南三里海浜焼津村産土神なり延喜式巻之十に見ゆ和名抄の益頭郡に焼津の郷あり日本紀万葉集等にあらはる古事記に相模国とあり

日本紀曰景行天皇四十年冬十月日本武尊初至駿河其処賊陽従之欺曰是野也麋鹿甚多気如朝霧足如茂林臨而應狩日本武尊信其言入野中而覓獣賊有殺王之情（王謂日本武尊也）放火焼其野王知被欺則以燧出火之向焼而得免（一云王所佩剣藂雲自抽之薙攘王之傍草因是得免故号其剣曰草薙也藂雲此云茂羅玖毛）王曰殆被欺則悉焚其賊衆而滅之故号其処曰焼津

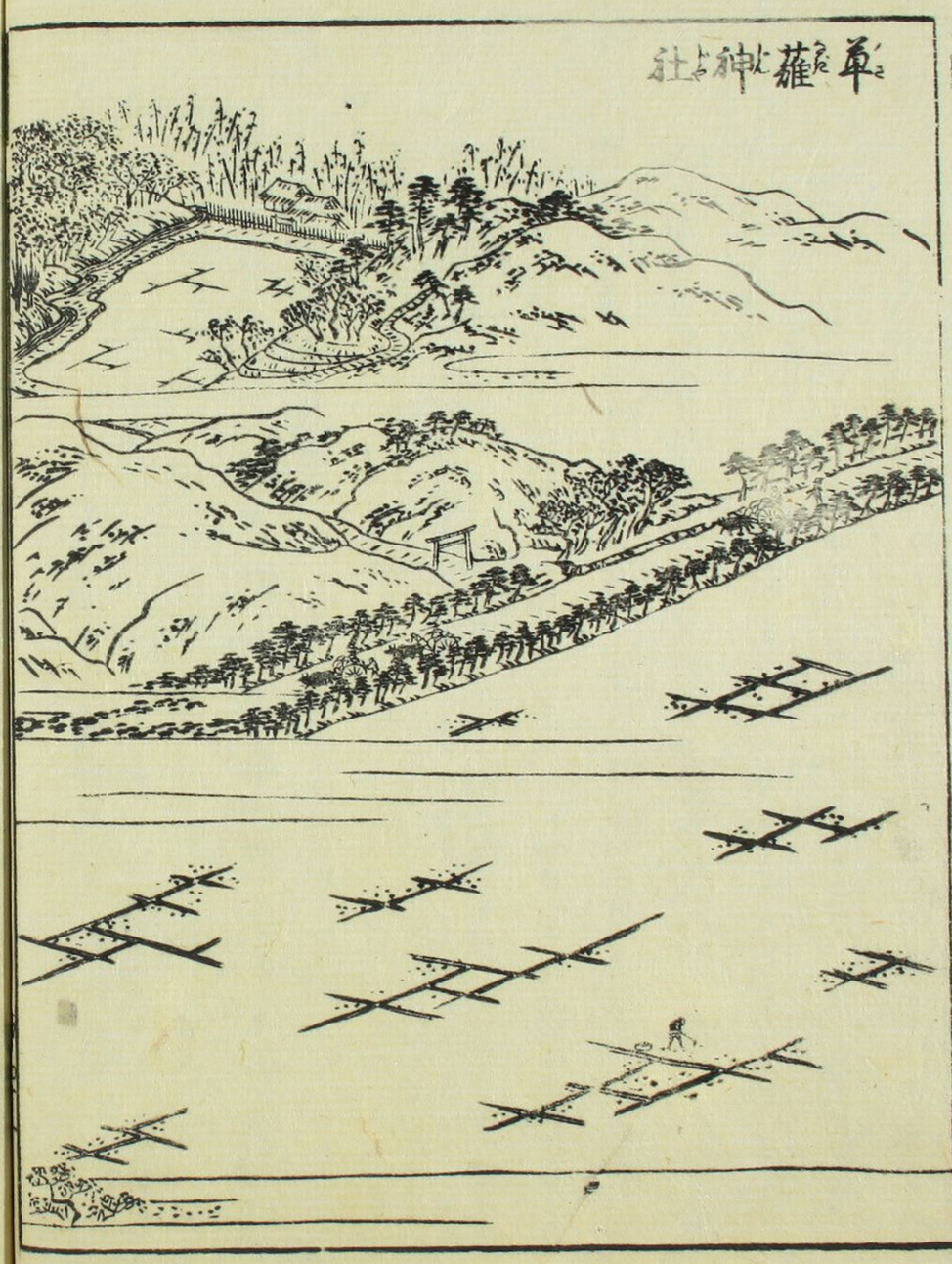
古事記曰入坐其野尓其国造火着其野故知見欺而解開其姨倭比売命之所給嚢口而見者火打有其裏於是先以其御刀苅撥草以其火打而打出火着向火而焼退還出皆切滅其国造等即着火焼故於今謂焼遣也

日本紀秘鈔云日本武尊東征の時路を枉て伊勢太神宮に参詣し倭姫命より授られし神剣の嚢の口を解開て火を打出し姦賊を滅し退きたる嚢の事旧記裏書に証文云興ある感ありて秘をなすべしと云

万葉　焼津辺吾去鹿歯駿河奈流阿倍乃市道尓相之児等羽裳　春日蔵首老

神皇正統記曰景行天皇四十年東夷おほく叛く辺境さわがしかりければ又日本武の皇子を遣はし吉備武彦大伴武日を左右の将軍として相副へしめ給ふ十月に枉道して伊勢の神宮に参りて大倭姫命に申給ふに倭姫命神剣を授て謹てをこたる事なかれと教へ給ひける駿河に至るに賊徒野に火を付て害し奉らんとせしに火の勢ひ免れがたかりけるに佩る叢雲の剣をぬきて側の草をなぎ払ひしに是より名を改て草薙の剣と云又火うちをもて火を出してむかひ火をつけて賊徒を焼亡されしに是より船に乗て上総に至り転じて陸奥国に入て高見の国（其所異説あり）にいたりて蝦夷を平らげ給ふ

末社
末社


草薙神社

草薙神社 駿河くう二里許東草薙村にあり海道をこゝに店海そこふまつり延喜式内有度郡三社の其一座と
祭神日本武尊 例祭正月七日二月十五日九月廿日四月廿日酣飾旗仮神供あり
末社 本社の左右方 住吉 春日 愛宕 白髭 巖嶋 稲荷 荒神 天神
本社の右方 内宮 賀茂 牛頭天皇 子安 八幡 山神 疫神
高サ一丈八尺周八丈余
神木樹 社頭も店の側にあり羅山
社傳云 日本武尊東夷征伐の事日 征到處幾山川 欲為一黎民解倒懸一東征 腰間一劒自蛇龍動一雲氣吹消一蓑草烟
丙辰紀行
ひとり一村にまで逆賊ありこれを平げさごめと火を放て尊を焼殺さんとす
これを尊佩の劒以ふりはらひ草を薙ちて おそらふ草ぜてこく唱へ 薙草劒
こゝにふごそこられまで夷賊の方へ烟をびこと尊を怠るおくまで
叔母の飛初ひ天社蘢雲の劒とやせ一劒を雄の劒やそ名ばかられ
尊劒焼むとおそるおそれを火は焼はら跡け草を掃ひ所を害難と名
つけて尊社荒魂劒をふ祭ひ其後 景行 天皇五十三年秋八月
又白王群卿小紹一て曰尊ひ征せ一國郡巡視せんそく
直ふ車駕以東一ゆふまで川伊勢ふ還ふ東ふ入こ九月廿日まで に戀駿
停老れ一尊ひ神恩以鎮ふ其所を奉ふ初ふし西ふ神社あり
一ゲ天正十八年官家社領あり本多ふ
ふあり毎年九月九日ふ奇形祭そふ
祭ふ社家々ふ配るふれい 天皇社御祭遺一ゆふ遺風と都て社頭及び村
中九土地みそ玉色の土ふして硬のふ一挽ふ逆徒征伐の時ふ難
排ひ向ひ火以ふりかく殺一ゆふ兆ふんとこゝろれる
梶原景時墳 孤塚の東岩原の左の方梶原山ゆありふ圭山ちそく裏言の浄剃あり本ふ
本の其一株又峻路以十七八町ふそふ大内の説ふそ以基の能し七体麗
あり又名馬拐墨跡来りて其時景時自殺場とふた輪の石落
今ふ笹の葉半分ふ駿馬の脅ひらふ小篠ふそ其町のおいさ
又山中ふ拐墨馬蹄石鬱水石ふそ山下ふ龍穴ちふ
仙門ふあり小祠ふあり梶原が像七人の牌あり其外頼朝公社家政ふ
持念仏のふ意輪提吉以本そふ
東鑑大意
正治二年正月梶原平三景時当国一ノ宮ふ詣をふ将軍頼家

人々に憎まれ奉りて子息景季父子を相具し上洛の駿河の清見が関にて其近
所の甲乙人的を射るとて集りしが途中にて行あひ是非もなく騒ぎおこしければ
此人々怪しき奴が射たるに梶原は狐崎にて出合せて遂に軍に成たる芦
原小次郎飯田五郎吉香小次郎などいふ所の武士先に進で戦ひたるが終に
梶原景茂討死しぬ是より国中の兵ども大勢あつまりて責たれば景
高景宗景則景連も討死しけり景時景季景高叶はじとや思ひけん後の
山に馳入て獲十文字に掻切て亡びたり頭は其首をとりて大路にさらし
つゝ後世の為の蹄にかけて梟首に朽果たり梶原は相山ならず本の中にさ
金澤佐殿が助けなりし法住ふどして頼朝卿天下を治め給ひ
なれば景時郎時を得て威を海内に耀せり殊更無類才智ある人なれども
侍大将と成りて平家追討の為に西海に赴き源廷尉と逆櫓の争論に面目
を失ひ義経が讒しけり其酬ひとして申いへり其後廷尉あらひや
範頼源家譜代の家臣多く滅亡したるはみな此景時政子景時

が姦計によると後に譏られける
當うちある程にある本陣に石を高く積上て目にたつ所ある塚あり
人に問ぬれど梶原が墓と云へり蓋し道の辺の土を塚になしたるものならん
亜相基中納言の口ずさみて飛鳥路の乗も春の茶あやぶさりしとぞいへる
特にいひしれし是文吉き塚ありけば名ごり残しし哀さ筆を伝
かたらればいかなれども人はさへけと回を滅ますの梶原をも
将軍二代の国ぶちより武勇三更の名が浮る側にも人々もとぞふたるいう
宮の中にありしんかきの由たる縁にて悉ちに身が頃のかさにかまつ
れば鳴あきも延へんとやおもひたる都の方へ馳のぼりたるほどに駿河の国吉川と
云所にて討れにたりと安し事はまて其有なりくと哀に思ひ合されける
讃岐の法皇慶暦の部ふ数あひて白峯といふ家にて崩させ給ひし
所にも西行法師の諸国にまはりし折にてりしやあいむらうの跡を訪ねしと
てもかくらんのちの何のせんとよめりたるはまがふ所にまして哀さ身のあ

此事以外に及ぶべくもあらねどもゐさゝか其由はゐとゝかゝれに覚ゆ

其それ由も見ゆるかれし亜鉢は〇の魚に岩をさゝめるなり　光行

姥ヶ池　海道平川地村田畑の中にあり　又姥ヶ原といふ方三町許

此盆池と其側に松榎の古木二株あり　里俗に云文永二年二月八日

長氏某の妻嫉妬深く此池へ身を投て空しくなる　其怨霊此池に

こもりて今に其人の名をよべば泡高く沸上るといへり

あり又姥甲斐といへば泡を出すといへども早天にも涸ることなし

海道の水脈此池に淀み露くも溢沸するといへり

駿河國圖にも有馬の温泉のごとく泉水あり　是温泉なりと

州有馬の湯と同じ　羅山先生の銘あり

姥ヶ池のことは名所圖會にみえたり

有度濱　有度郡の海濱をいふ　風土記に云久能浦なり

新古今　うど濱はうどのみやこの浪のよるのやどり　御製

播州名所圖會に出せり　神社の前に至るまで有度濱といふ

夫木集　いつとなく恋するかたの有度濱にうとくも人の成まさるかな　相模

萬葉集　駿河なる有度濱のうつせ貝かひなき恋をするぞ悲しき　大中臣能宣

有度濱に天の羽衣むかしきてふりけん袖や今日のはふりこ

五　平忠盛

有度濱は今も紀伊の国の田子の浦に並び有名の地なりと見えたり

久能山　駿府の東南二里にあり　當山の開基は古人の紀行　貝原益軒

諸國紀　羅山子の丙辰紀行等に見えたれどもまた略す　小田原

久能の山ちかく月をみてよめる

かみよのこゝろしるさる旅ゐれやかすむふじのねと月にまかせよ　西行法師

龍興記　あげ川満ちて出る浪の光は東にわたりて月を見るにかなひて照しかな　源光大臣

丙辰紀行　寂然長隠久能宮明徳惟馨神國風

東遊海道記　億兆小臣望不及帝郷路遠白雲中　羅山

宇度の濱とよれば浪の音風のひゞきも所の濱の東に靈

地の山寺あり四方たちならび四明天台の意あるもの堂閣繁昌しく

本山中堂の儀式をあり一乗讀誦の聲も十二週中に絶ることなく

安居一夏の行も採花汲水の法を勤行の修する所は中道の

教法籍錄を奉じ勝の頭に達しまの利とする所も下立の荒生帰依と遠近

のきそひおいふ伽藍の名號聖徳太子の菩薩の建立主本の風情し本そのれ

實地見れば觀世音と尊崇陽洛山の聖容出現の月あるか

大小の佛法興隆の地なり數百箇条の星漢霜を経て僧俗止住のみ

旦三百餘宇の禪房舞楼を見る　神山勝に渡て悪障取ふ

せざる人形の本容の寺内に納めて苦業とする千手觀音の山より

石船ふ等くしき北ふそうりゃひ
護法と号し彼海岸山村の服を着方より少くあて有縁ぶし山ふ導
宇度渡れ品天面ぶ北ふ渡ふ海をべりむ〳〵稲河
ちまちふ人天人の渡をれ下に楽ぶちべて舞々る ぶうてまるびし舞
々り又人の見る ぶうてものでくふ あて雲ふ隠ふ々りそ係ぶられた
一面形を落せり寺れ寺へおとりて其寺ふ舞楽
ぶちべて法会ぶ指引ままをまがふ渡舞人氏とん二月十二日常楽
会とくち中れ大学之其渡天人御り廻雪の春の花ぎこふぎまり
曲見い業月の春と安ゆりれ渡ぶれば松ふ雅琴ふてく渡ふ川
づこあり天人の楽ぶ今安ふ〳〵り

独ふりして法をとあがまふ

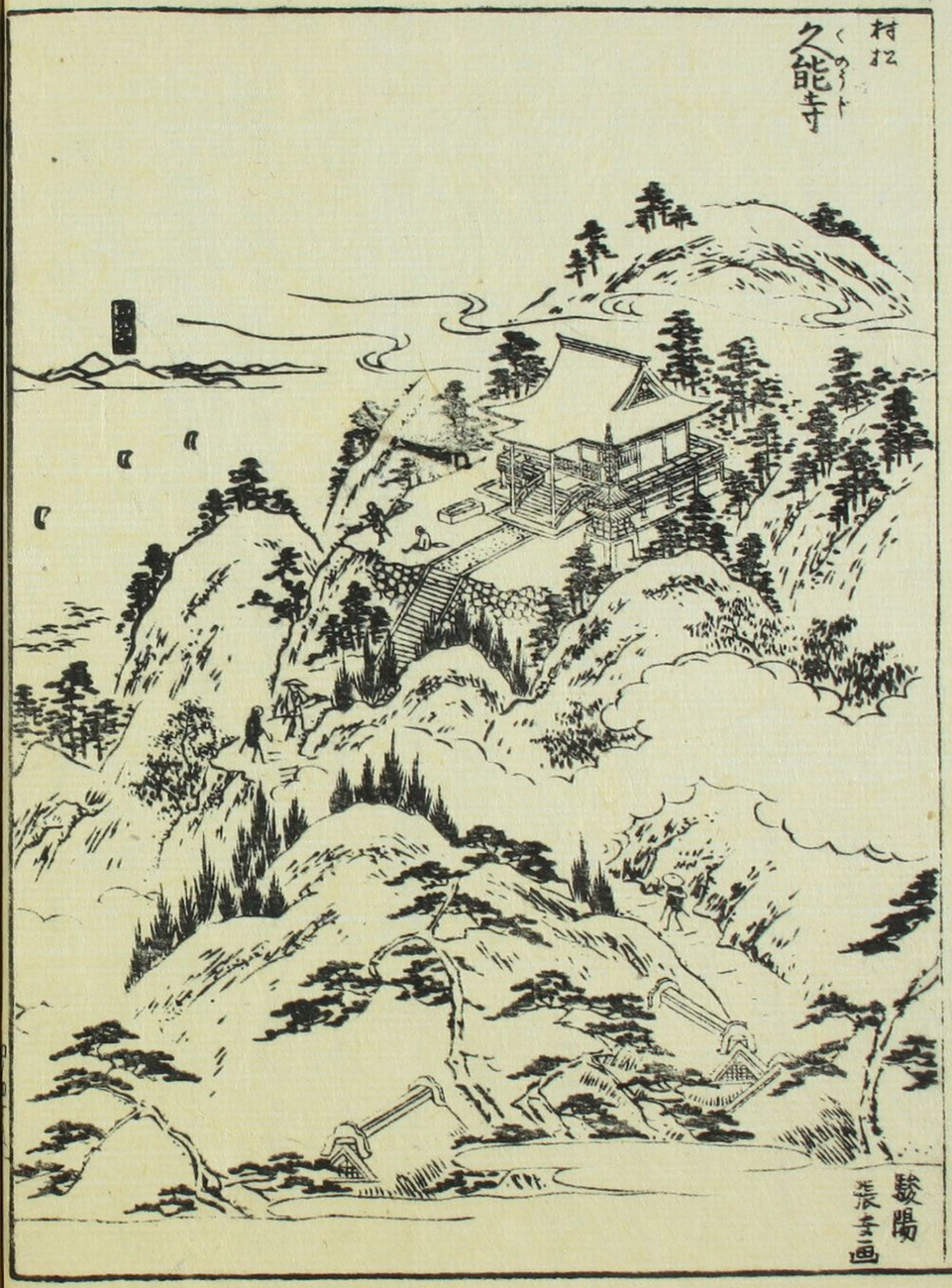
補陀洛山久能寺

有度郡村ふあり江尻駅より九町

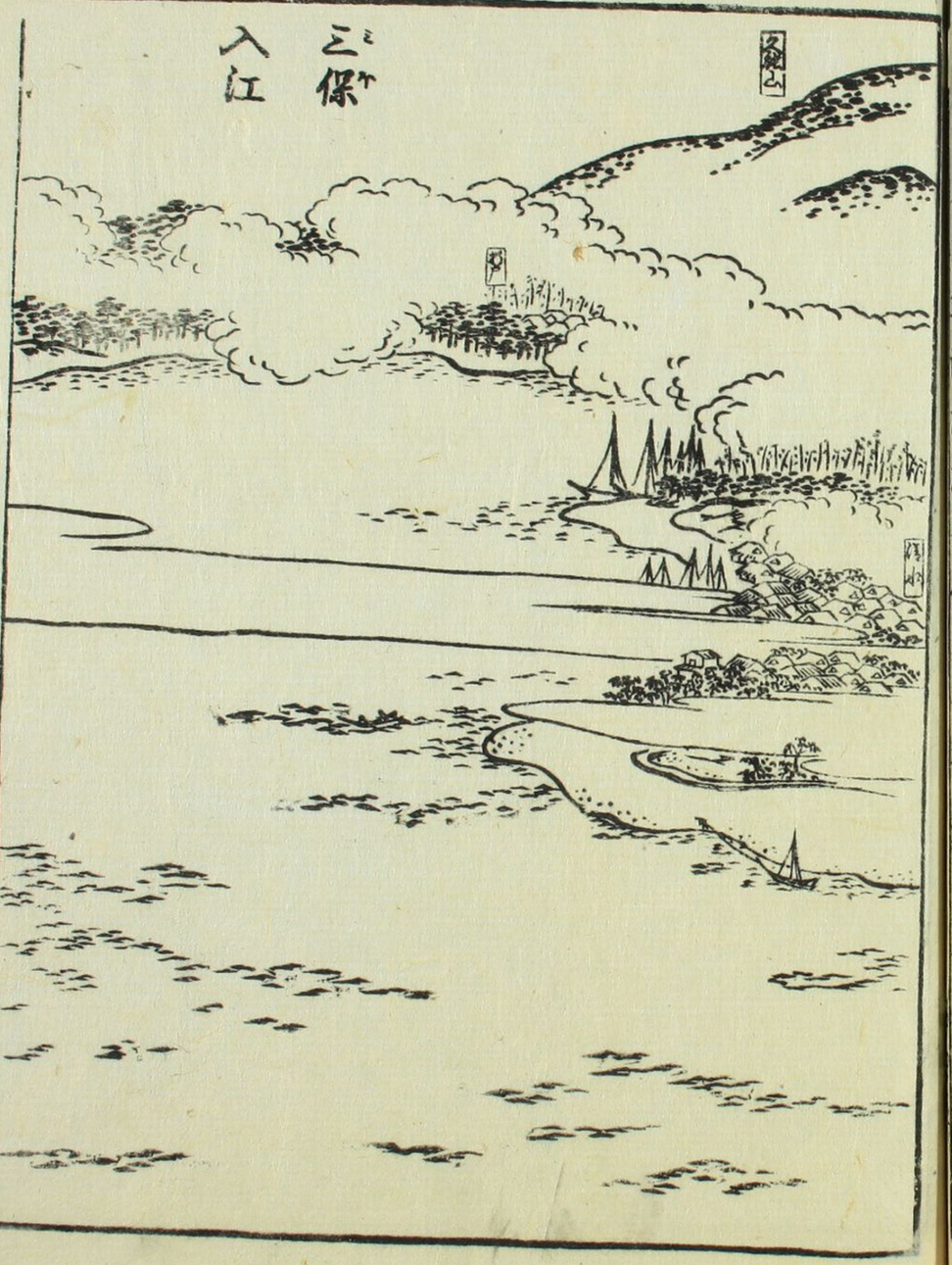
新義真言宗 来迎院と号し坊舎十宇
本尊千手観音 行基 僧正の作 感得のそ像

境内ふ末師堂 観魔堂 鐘楼 荒神祠 鐘楼 二王門 地蔵堂等あり 其外 稲之神祠 拝殿 当山守 推古天皇時宇
下ふまめる射田猟しゆ人深山ふ入る所ふ老杉村ふ様ふり金色の光あり始ぐ
めやしこれを探ふ見ふ南ふ面深檀金長五寸許の千手観音公得ふ特
のそひ膳ふ給し寿俳院を営て安置しまり百町の田園公喜捨して寺産
とれある夜八旬の老僧香染の袈裟公着く久能つけ松上ふ立く我ハ補陀
洛山の海土ふり度元生の為ふそ中来く新現をとのひ給て委覚し故ふ山
号ふ補陀洛山といひ本願の名ふよって久能寺とるく勝石百四十年依憑て
当老七年大僧正ふ基菩薩海内巡国の砌ふ〳〵ふ立ふの金像と胸中ふ
蔵てみづからそ大悲ぶ像を彫刻して安ん今の本尊是ふも寺ハ風景
の地ふして士峯ハ鮮ふして愛富綱根二ふ山近く漁猟の好人田ふ面ぶ
始電清見ケ関清水ぶ湊入江と走る真帆片帆漁の舟所〳〵ふちいさく
三艘の松原真妙ふして出嶋を八ツ頭といふまれしり眺望の任一し

村松
久能寺（くのうじ）



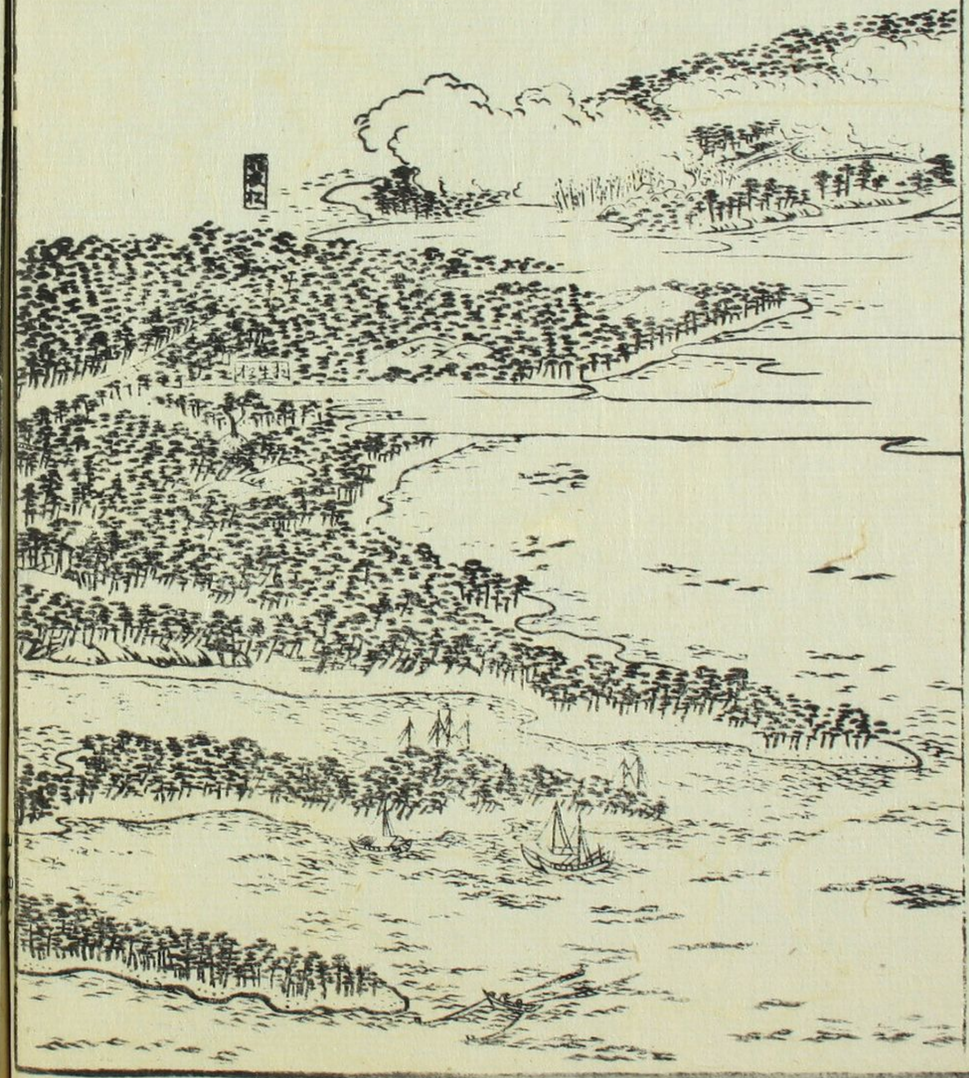
駿陽
張士一画



久能寺 什物 二面八幡宮弘法ノ所ノ作之 龍王面 天竺檀香ノ像
東相御影 弘法大師ノ
法華経廿八品 弘法大師ノ
翁の面 弘法大師作
元五條袈裟 聖一國師入唐ノ法衣
書外弘法大師ノ 恵心僧都ノ縁会啓書記ノ 古舟画ノ
西辰記
久能山の狀を見るに海岸孤絶の所ニ有ニ老人堅坐の地ニ
洛山ニも申ニ三里餘の東ふちあり久能寺と号ク 聖一國師薬科乃
建ル小寺ニ尼女法師を師ニ一台教を專ニ入宋ス後建長宗
弘伝ル東福寺ノ 延ル空ノ人尊ク久能の尓長老と称ズル
家ニ浴ル瑪瑙の鶺鴒を以寺ニ送ル又源綱州も所望ス
ル横笛を寄進セラレシ 今ニ猶ホ沈魚の秘ヲ存スルトゝ
寺僧の書ヲ見るニ多ク勅進帳ありて紙ニ写シ
ニあり見る其外推古天皇ノ御時革創セシ事ニ
疑ハシ〳〵ヲ多ク記ス
遠ク尋ネ到ル斜陽過客居僧談ス所ヲ
身ニ是ヲ此山清浄色何ノ来無垢在ル南方

羅山

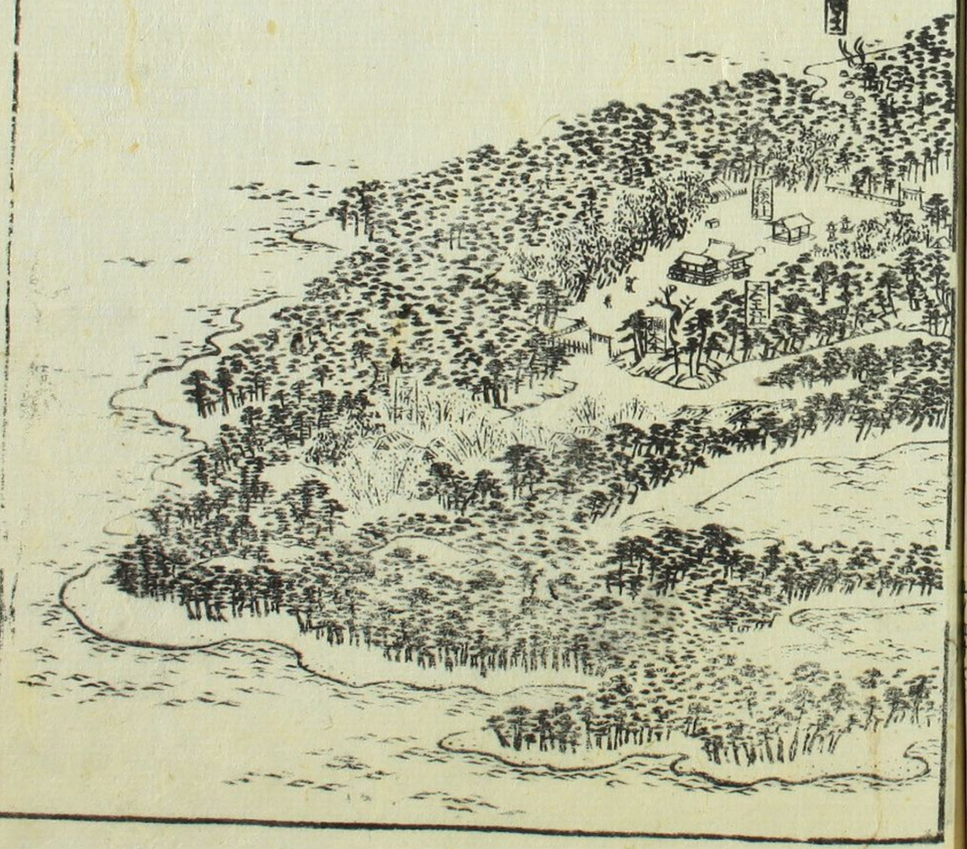
三保の松原
三穂神社
羽衣松



清浦屋
春盛師
之図

そもあたご保の
神ばれ
あらきそで
みるめふうの
浦の松原

南院一品宮御
諱仁親王



三保松原 三穂或ハ御穂ニ作ルハ誤ナリ 駿河名勝志ニ曰 三保ノ松原ハ江尻ノ東北ニアリ 東ハ折戸村ヲ限リ西ハ三保ノ松原ヘ着ク又陸地ハ清水ヨリ海渓ヲ過テ折戸ヨリ三保ノ岬ヲ廻リ三保ノ松原ヲ里半餘三穂ヲ廻リ清水ニ抜ル海渓ヲ過テ村ヨリ約壱町ニシテ九四町四十二間南北巾十九町四十間三保ノ渡瀬渓成ス扈宇ハ久呂等ニ 狂歌 風早之三穂乃浦廻乎榜舟之梶人動浪立良下 万葉

忘れをよ清見が関の波まくら三保の浦松 平藤ノ親三

玉葉

こゝよみかく函嶺の杉間より三保の浦松 清原ノ元輔

風雅

清見かた三保の松山寺ゝ書初くる入日移るみほの松原 冬座敷

玉葉

松を見てうき浪路の雪や猶ふるさと恋ふる三保の浦松 半宗宣

新三部

絶ぬのこゝろは猶もふる雪に色かはらぬみほのうら松 尼東太文倩実

亀山院七百首

吉野風ふくをりくみほの寄松原空をそめる月哉 綾教

下有お合

清見かた三保の松原おし並くて三穂ヶ浦松のうへの月を見る哉 中務ノ親王

続後拾

三穂が崎みなとさわがしくれなゐの浪かけそふる松原 冷泉為村

御穂神社 御穂松原の神ゐあり 三保村生土神 延喜式内 廬原郡三座の其一也

祭神 風土記ニ云 三保は形ハ其把るがごとし 故ニ御穂と名づく 牛頭天王 羽生松 松原の中ゐあり 古梅 神鏡ニ二枝あり 倶ニ大樹 羽衣松 渓しまひ古松ゐ繞 社くら東面ス 門一間 社ハ三間四面 古石造の祠あり 風土記ニ云 三穂の崎 雑宮 羽車 羽衣 羽衣脱の所 羽車にまて 羽衣羽車の事 羽衣羽車ハ天人降時 羽車ハ天人乗物 羽車 遠あり 神馬 神輿 式部 古補 貢業 伊豫ち伊豫の三穂社ゐまりしてなりけるを 明神ふあつまりそびしてなりけるを 宿度渓ふお渡ル羽衣むうつそ 渓のお渡の羽衣妻いさそ今も妻あれ神やふるらん 駿国雑誌

寛政丙辰秋八月在
久能山上望三保崎
平安原在正寫

蜃戸風煙渺浦
松仙氣之羽衣
何處覓帆影桂
雲端
平安畑橫洲

三穂ふ浦〜まで明神八神籟ふ載る所の矢穂神社是ハ羽衣の松そ
むし〜そうり乙女ぞうりてけれ原に羽衣松志〜ルしを漁まのそうひ得さる
事の〜ルれのふ巫ならんと人の云〜ふものの雑閑法師う有度渓ふまれ羽衣
ぞう〜そうそうあるいこれ多るべ〜三保ハ駿河國五度郡ふあれそ
（東行紀後編日）
尾州亞相義直卿三保の名所神社拳場向せらる三保ハ明神ハ
仲哀天皇ありとかゝれ神書を考まべ三穂津姫ありく〜高産霊亜
そうれ御女ありく〜大己貴大名ふ嫁し〜ありんとて天上うりて〜ありと名跡ね
ひるひてれ羽衣うけかれ天女ハ天降りしたる物語是ありうと神主ふ
ぜはかこはそ〜れいつ〜又天人宮れ神主ようけくうる縁起一巻 仲哀天皇
ありこよう〜つ〜ふありいうをも此國ふ来ける日本武尊を犯まを所多々ま
其海ふ来そ天下治ありたまふ皇ありし〜ふ犯りう 因縁も有べし〜そ〜
まれ三穂松原ハ吾嬬ふおおく〜名ぞうる勝地ふ〜て古人の秀詠多〜

久能寺度渓より東ふ連りたる出嶋ぞ其間寺里繁ふ〜て洲渓れ名ぞあり
煙さあり磨さあり狭さあり中々数百みれ松の緑ふ西ぞふ枝葉沙風
ふ吹〜ぞえられ高さあり低さあり直ぐあり曲れるありそ〜ま色窈
窕そ〜てこふれ美人紅粉を粧ふ〜一度ふ笑うがし〜魂ふ東小れ方ふ
見渡せは名ふ〜ぞふ富士の高根愛鷹れ翠巒お出浮ケ原吉原蒲
原れ駅薩埵山興津川れ流れ清見ぞ関清見寺の清れ声ふ悠揚ぞうく
月ふ清霜ふ冴〜う田子の浦端ぞ松の梢ふ走るのと疑る
小舟ふ清水れ漾旭〜く八艘ありう漁れ家行ぞふ〜く奥
ぞうふ客人の置〜南ふ滄海洋々ぞう〜て大鵬ふ乗ふ〜て天ふ
飛ぞうふ志深州〜ふ鮑ぞる海士潮ふも筏女みるぞをけぐる業ふ
れのぞ海ぐ〜いの川ぞうあうれ〜ぐる〜ふ〜 渓れ中ふ家ありぞ渡瀬
渓ハ頭れ洲嵜成ぞ尾宇津久呂風浪ぞうふ中央ふ三穂神社立
ちふ社頭ハ神さび〜鳥居の端ハ羅山みれ書れ〜ぞ羽衣の渓ふ羽衣

れ松蔭田園うつくしき海辺の神社の什寶ふ天羽衣さへ
納るものから天人より作りし笛や濱まさり天人ふ羽衣故歟
裳羽衣の曲を奏し七寶充滿れ寶故歟
あらん懇して此松原を看く離々さし
て結びさるもの多かりしいふ所願そや
松葉多く又肉薄容もかりしやむ
く三五九月九十又日ふを近郷ゟ馬沓多く神ふ繋ぐ
むしろ風流なる名ぞ後ふして士農
耶うし然れど三國の名山ふ相對の名勝
かくく日高く江尾ゟ駿河
江尾 駿河 紀伊 奥津 梅墅 三保 甲州山脇 三良 富士 或ハ 穴山
この清見潟ふ漁舟しばしばありまさ
見渡を折々紙折句ふ

富士見むと汐こす川清辺のまる日ふ富立歩そ松のけをゆく 冷泉為村卿
清見潟さよ白妙る浪れ汀ふ立つゝふ見てる比富士の根
岩瑳山
三保の濱
岩瑳山もるゝくこふそ見れば中程をそゝまりるふ友白雲
三保ゞ濱ふ有れるふ来ゐつゝれ松さるまくいさゐる松ゞ
願名川 江尾の駅中巴川の上流ゟ西奈ハ郷名村ふ出今願名
川ゟふゝ浅畑の沼ゝ願名川ゟ海合ゝ巴川ゟひ橋ふ見ゟゝ
ます
せゐ川や早願をそゝ仰水ふいも恵ひる 第六編十三 烏帽子
庵原 ふをれ郡名ゝ又廬原ゟも書ゐ庵原郷庵原村ありゝ猫事記ふ廬原國
ゟる例ゐ名ゝ駿州志ふ國後波駿ゝ隣ゟ波爾廣田ふ長田ふ東
波爾國 新千載
清見潟関ゟ外ふいはゝゝのれ松さそ浦の色ゝそ成れ 基中納言 百首
新後撰
清見潟ゞさ打そゝれど庵原のみほのあさ川ハ波ふゝ 文永 弁内侍 烏氏
ます
ひれもふりふ袖ふむそぶ庵原ふれ清見潟ふ今際ふ風もかそれ 通二位 雅
庵原郡の景勝
盧嵓寄 又濱寄
清後撰
いほ崎のふね多の浜れうふ川のれて多さ三保ふ見 勝後撰

夫木　磯浦のこなたの浜の友ちどりゆみ川しほに鳴さわぐ也　藤原定氏

角田川（すみだがは）

現存六帖　風ふけば浦に波たつ磯浦はすみのえの浜も舟もかよはず　前大納言為家

磯浦の西しばしゆきて今礒の川といふ土人云足利氏鳴山合戦の時此川にて旗をおしたてしよりかくいふとぞ　伊勢物語の角田川は武蔵下総の堺にして又大和にも角田川あり大和名所図会にくはしく澄月が説に紀伊にもありといへり　紀伊の国隅田なれを磯浦なるべし　并蛙抄

夫木　都鳥こととふもあれや唐浦は角田川原も名をやおらむ　定家

夫木　唐原やもろこし河原の磯枕なびくみれとおもはぬ浦かな　源家長

清見関（きよみがせき）

家集　きよみ川河風さむく行水に影も清見が磯ぞかなしし　源氏真

詞花　よもすがらふじの高根に雲消て清見が関にすめる月かげ　左京大夫顕輔

村老云関の古跡は今の清見寺の門前にありと云り　八雲御抄には駿河の海道富士の麓にありと書り

千載　清見がた関にとまりて行舟も嵐のさそふ木葉なりけり　大納言實家

續古今　忘れずよ清見が関の波間よりかすみて見えし三保の浦松　中務卿親王

新後撰　清見潟雲もまよはぬ浦風に月をぞもる波の関守　前大納言賢季

新後拾　関の戸はさゝで明ぬる清見潟月よりかよふ浦よ千鳥哉　今上御製

同　きよみがた磯山ごえてひとり行ば関にとまりぬ夏の夜の月　前中納言有房

同　されはなる身をも浮せぬ清見が関は月をとゞむや　僧正行意

風雅　駒とめて見る秋かぜに明ぬきよみ潟ちりしく花や波の関守　法橋顕昭

續千載　さやかなる名をば清見が関の月かげ月に関もる我をいかにせん　中臣祐臣

續後拾　身は老ぬ名をもいとはず清見がた越ゆる人の関路なるらん　法橋顕昭

千五百番　あけぬれど波はゆるさず清見がた関路に月の有明の空　従三位保季

草庵　清見潟関もこえゆく旅人のこころを路は三保の松原　頓阿法師

淨見埼（きよみがさき）

今の清見がさきなるべし

万葉　廬原乃淨見乃埼乃見保之浦乃寛見乍物念毛奈信　田口益人

清見川（きよみがは）

今の唐原川なるべし

夫木　清見川いづるみなとにさそはれて落ぬる滝の入海　衣笠内大臣

清見浦（きよみがうら）

今の清見寺村といふなるべし　此所に名代の膏薬の店あり　其外東海の店多し　浦はみな沙浜なり

大てふの松ありとも侍る月を浦乃秋うち也

清見潟 今はた見嘱るべし 昌水 又領也 睡也

新古今 ちぎりおきし絲どころ 紀友則

元

見しま人の情をあよ清見がうら波をかこちし袖の上哉

慶雲

清見がた波をかこちしたびねまこやのうら月をそてんん

新拾玉

清見がた沖は汐風の夕なぎに入日うつろふ三穂の松原

従二位行宰

十首

皇太后宮大夫俊成

月前

清見かた波は千里を雲消てやそしま〳〵に袖ふるる月哉

権大納言 為尹

十二番自記

若の浦と清見が関をまくら哉波の白き袖をうち着そふる

飯尾為種 為清

ふる郷のいとおう

清見潟うら〳〵ゆるいそれてこん浪はねしき名残ぞ

百伴

おとなくくれてものてうりれ海近き里ふさはりぬ浦人のあわびさゆるる

よりうるりがるるうりいとむろう〳〵名句ひろれが歌の事を感ぐてう〳〵といひ

久うく人のことはもありしかも浦乃秋うち也

松の上手ちをきく

あくかもよ金所ふ芳ふ〳〵清見潟

清見がた関も過うく 恋〳〵

おれて波ふむもぶ濃の袴原風くふ風ふ物思ひまあくう

久うのあり川まあれおりひうふ

の河時特門とふをのあり川満ふく逆謀起〳〵久れふを平らげん

たふふうぢ川民アム々忠文を清原の重藤とふふ

久うぶ清原の重藤とふふ〳〵久う武蔵ふ至うてうくまう

汐久ぶ漁舟恋火の寒〳〵て浪と焼驛訪れ給の事うち

山を過とふふ唐の歌を象ぶ先久れを民アム〳〵浪とう〳〵久う

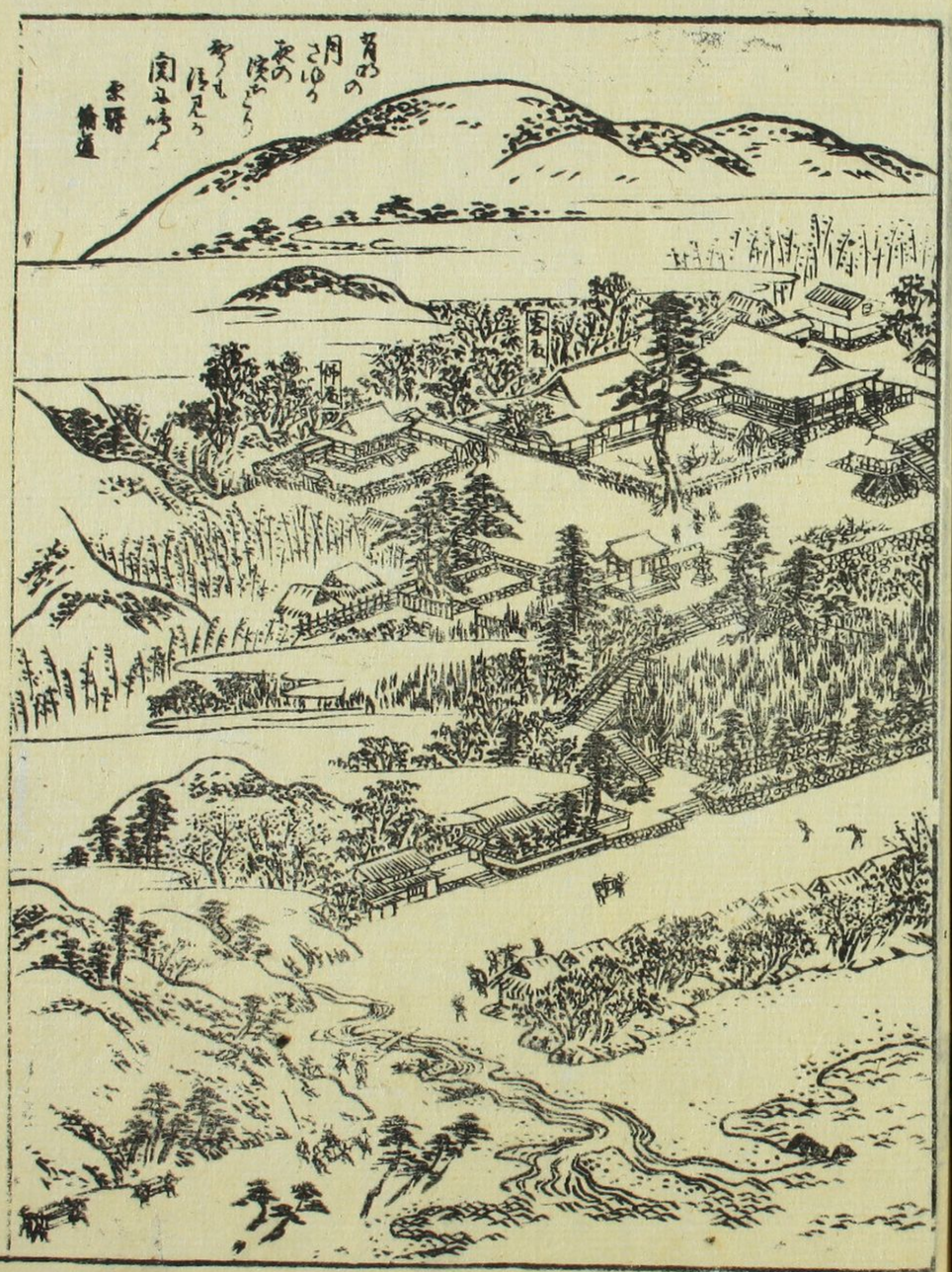
と聞ふをあうれも

清見ぐ関とふふてそうくふ

清見寺
清見寺

千五番
清見潟
うき寝の夜半
やうる夜半
月ぬ山の
とおるくも
佐成女

清見潟
あらし
あらしと
同し
秋の風
紀友則



巨鰲山清見寺國禪寺求玉院宇奏都與津阪見寺梢ふあり俗ふ清見寺
寺尊正觀音 庵像長三尺客殿ふ安ふ又甚ふ尊ふ長一尺中一尺
慶長年中一尺客殿ふ安ふ海山いふ一つ天台宗ふ
永世孝享 客殿縁側の欄間ふ掲ふる額ふ
琼人齋孫朝陽の書ふ
候月長輝清見寺 客殿ふかふる額ふ
芳風不斷騷汐山 琼人齋ふ
諸佛宅 上ふ同前ふかふる額ふ
朝鮮人壽螺山人書
足利尊氏公像 客殿ふ安ふ琼人の畔ふり甚ふ書云
琼人求玉院大洋尚公大居士又山中ふ此ふ懸ふ
客殿畫 獅子二牡冊 琼人の像ふ安ふ
狩野探幽筆 開山堂 安ふ山海ふ開基國師の像ふ安ふ
山清見寺の漁人支給の繪を漁ふ
見寺ふ此ふ懸ふ
見寺ふ此ふ懸ふ
自覺聖智禪師像 開山の右ふ安ふ
護國禪師像 開山の左ふ安ふ
龍虎兩軸 書院ふ掲ふる
狩野探幽筆 客殿ふ安ふ
石浮屠一基 原の駅沙羅樹下白鷺雙棲

同一基 高寺門ふあり鑛ふ云 虎山一居士慶安二己丑年
八月十五日生國田中清左衛門尉長世壽六十九歳
寺僧云此人の墓ふ原谷戰の時石田光成ふ捕へ
此禪刹ふ世ふ名高く參ふい江海渺々ふ
淺ふい山嶺巍々ふ
嘯ふ絶聲ふ
祖堂の四君樹い朝鮮
木ふ一つ四時ふ花ふ絶ふ
梅い客殿のおふあり
枝の流れ
頃ふ匂ひ芬々ふ
羅浮の夢ふ
壽陽公主ふ
書院乃至中ふ
九疑ふ落る飛泉ふ
泉ふ
石亀石ふ
石虎石ふ
國初將軍家ふ鑒與清見寺関ふ
兵器四ふあり
扒頭
尖刀
其外寶器
常ふ
開一
牛ふ
犯女ふ
門ふ
則東海道ふ一つ
卿相ふ
寺ふ
駕ふ
停一
詩ふ
賦一
詠ふ

もろもあり茶店もお哉ゝみ白旗渡ゝて汐汲ゝ濱垂竈ゝゝ
ひと霧々ゝ〳〵風流こまくらの垂うゝろ月は名やまゝゝ須
磨赤石も及びとる物邑ゝ謝莊ゝ月の賦ふ白露空ふ曙ゝく
素月天ふ流るゝと贊ゝゝ〳〵

清見寺十境　當山十一世関抜和尚稿

清音閣　山門
峻嶺高閣倚ニ巍林一直ニ對ス松原十里ニ臨ニ大海一風烟
連慢卷ニ諸天一鐘鼓傍レ波流ニ鶴邊聲落ニ應真一錫霜
後月明長者金千歳依然形勝地將レ令ニ騷客一此
將軍石　在ニ山峯一
尊公陣跡濶之濱石一古名存吾自ニ新雀喉一泥西
三十萬天扶ニ漢運一五千人鼓ニ鼙聲一合ニ磐城一浪旌
旆色迷ニ櫻野一春維ニ昔將軍一慈所レ憩老松風雨聲
蒸ニ
清淨觀
海邊花木五雲興樓ニ在ニ補陀岸上一憑ニ風靜一潮音
隨ニ梵唄一天昏ニ樹色掛ニ龍灯一瑞池正佩空中ニ磬銀
漢仙槎月裡昇レ坐想人間難レ可レ到鼇峯鐘磬度
峻嶺
分境亭　在ニ前巖一
絶頂樓臺漢ニ闕清秋此日一攀ニ滄洲前暮色
三峯雪樹抄ニ人家一四氷灣引ニ雨纔ニ分龍爪嶺凌
波欲レ動ニ鷺頭山雄風須ニ臾拔ニ矜客不レ是蘭臺興
詩閑
三保
平楚蒼然浮ニ海潮一中存ニ古觀一畫蕭乙羽衣松掛
烟霞色鴨浦波連ニ鳥鵲橋一日愛千帆如ニ雪點一雲
飛四面似ニ山朝夕陽一半漁村兎ニ天樂一時聞月裡簫
利生塔　在ニ慶西一云北巻壇
湧出ニ瑠璃界一塔擬落ニ海中一攀レ梯遍ニ鳥道一巻レ幔倚
龍宮ニ恐尺天城雪烟霞巴水東勝因蕾所化色
相是眞空
巖腰亭　觀音堂名
亭子藤蘿外潮光戸牖間魚龍吹浪出舟楫傍
欄還ニ驛樹横沙月餘霞當ニ目山原眺ニ寺思ニ夏早
晩此占ニ閑
九曲泉　庭中瀑布
九曲懸崖上銀河下碧霄瀑ニ穿ニ樹杪ニ細落
芭蕉ニ疑ニ入ニ匡廬岳ニ也攀ニ鳥鵲橋ニ許由不レ洗レ耳此
地無ニ煩敵
袖子浦
鳥影横沙晩淚痕袖浦濤蘆花連ニ斤鹵ニ紅樹照
林皐ニ江白風頭促ニ月低ニ舟楫高妻其多ニ旅思砧
杵擣ニ綿袍ニ
田子浦
三保從ニ西出ニ正東田子洲江雲分ニ駿亘ニ嶽雪照ニ

春秋山向テ五原ニ起ル波連テ七澤ニ漫ル樵風化ニ在リ

詠ス古人ヲ

春暮記

今日ハ清見寺ニ尊像ヲ奉ス

松ありてよく波をしのぎその景いくそばくぞ

清風のかなたもそれ清きみふ波をくこその松原　光庭々

悪詩をどいうちはらひて信持ふ人をたのしみてお願ふ

絶妙ノ新詩聽ク更ニ佳ナリ推ス儲酬和ノ隔ニ天涯ヲ

芳聲驚ス世ノ京花客嘯ク月吟風ノ紳雅懐ヲ　大梁和尚

かくいくの絶法ありしめて清浄ふ門家ふめもてあふ仏物法をとあり

昂奥の發句はうりまいりしとおれも

月よんうたそ　　送芳

かりそめ遠のゆふ波

うくを濁くる魚をるまでであるさ法さもなりてこそうのこて仰線

名ありてく今宵いかの月沢法乃夢月をおろうけるのまくふ　玉緑

清見うさ一夜いかの沢法乃夢月をおろうけるのまくふ　玉緑

以紀行ハ寛永十二年ノ秋二條殿ノ左相府若公烏丸丞相光廣卿ヲ

お供ヲシテ御使ヲ吾妻ヘ都ヲ出ヒシ一紀行ヲ其ノ次ノマヽニ

丙辰紀行

清見関ヲ延暦廿頃奥州ノ逆賊高丸駿河ノ国ヲ攻入ノ関ヲ陣沢

こりくと坂上将軍討破りて高丸奥へ退ク一年久クありて後ニ傳法

沢ヶ所ヲ寺ありて東ヲ恵日山乃东長老聖國師ノ弟子開聖ノ寺ヲ

清見寺ト名ばけ又ハ巨鰲ヲ鎮ノ辺須ノ心寺ヲ属ヲ寺ヘ作ル

紅塵ヲ巨鰲山入ル門ヲ心自閑ノ禅徒今住ス寺ヲ

寇賊昔攻ル関ヲ三保窓櫓裏大洋帆楽聞ク

起鞭征馬士斜日照ス人顔ヲ　羅山

良慶海道記

清見ノ関沢ありて西南ハ海ヲ高低ヲこりふはをこ沢まくり東北

名ヲ山ト儀ヲ嶮難同ドク足沢法まで此ノ磯ノ下ニハ波ノ花風ふみくく妻ノ

さざ波ヲ岩ヲくふれ松ノ通ヲ沢法ヲ波ノ陰ヲ岩ヲ打

ま月のみふねありて清法陰ヲ

てもくな沢潟ヲ有ヲ

同ふふけらて耳目乃感ふ

五ふ通沢ヲ松風ヲ

石あり。阿倍の多武峯といふ所ありむし。阿ちの布施こうそうが
猿ぐつわをふかりこと。

吹と雪と清見が関や富士の山

むかしこゝを清見が関といひしとぞ。

和名鈔ふ息津と書れ或ハ奥ハ又ハ仲津ともかゝれ書り由井より興津へ
駿河 興津 ハ道ハ山水の風景真妙ヤーにして東海道第一の勝地と名ゑ奥津海岸
お紀州へ御下向の節右楫の御歌

甲州身延山道 駿河 興津駅 左の方ふ法華題目堂あり是より身延山へ参詣
八町 万沢まで三里南部まで十三里餘其間通法を奥津より完原まで四里
道ハ蘆まで三里身延山まで三里この外ハ一々諸堂ハ奥
院まで五拾町ハ道ふ清見寺ー奥津川を渡りて面山一名表ハそれ先
赤沢村まで五十町赤沢より路嶮岨そハ左ようの路をふい旨士川の
西ハ岩淵より入万沢まで六里餘く万沢より身延山まで拾二丁芸
ふ同一街道へ富士川より中秋の月
奥津川 駅の東ふあり又清田川ともハ川瀬ゆて初夏より中秋の月
まで結氷漁もる半ー多ー至ー妙味ふ川の左ふ女体表女人堂ありて
ます
清見寺ふ月ふむりくるお多ゐの流ふて紙を海ふいづらん

駿亜

波そる名ごり法ふ駒をとゞめて奥津の泊ふちどり涼まん

江戸 翁五

海ふいづるみをといあるでゝ興津にてこゝや瀬々の狭衣ゆて 泰澤雅種

十六夜ふハ

豊ハの浜ふまいの月みくまでおとゝ月ゆげまでふ出るなりけり

たる所ゆゑしれハけのとゞまりてくれいうち柳しこ
ふ寄くまも見ゆれバはらくゝけちうゝ下ふーぶくの紙ハ川
ふ流ふ紙をひろひ取ふ

古奴美濱 駿ハの海辺ふあるなり 續後撰

ゐたくく今ハもねこれ浜ふ 新拾

頼めてもこゝろの浜乃沖ハ風ふいかゞ吹らん

續新古

駒ふ川む岩木ゟ山ふ雑ふそ人もまぬこの浜ふゐる神ん

續千載

家建ふうゝハの波いかゞ

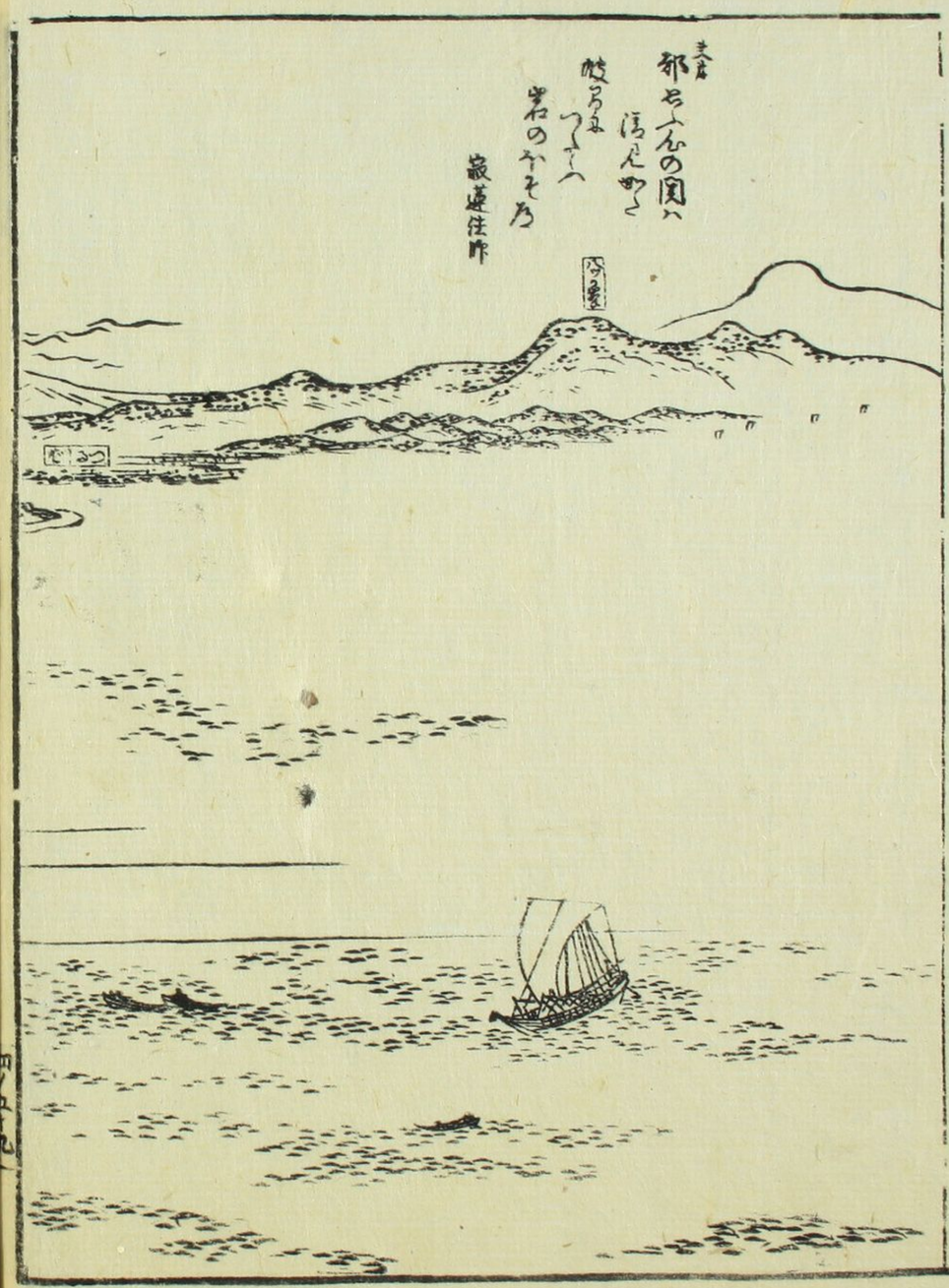
崎嶋 奥ハ川を渡りて薩埵山の海岸ふ出ふこれ古の海道ふ仙覚抄万葉抄の註ふ
清見が崎ハ今の嶋崎ことゝ云山道ハ山石多くして高浪おうふ
通り難しを騎馬の通ハくゆるくの人さゝふ添を願ふ駕ふてハ
ふもこゞの名ありふ紙幅ふ余ハ魚川の辺ふもハ名ある人同じく浪ふ
通ハ明暦元年朝鮮の信使来聘ー時ゟ此所の中上通々ふ
南ゟれく旅人の難ふ助くふ今の海道是なり

藤原貴場

家陸

龍華寺法師

宗長


能因法師
都をも人の関ハ
隔つれど
なほ白川の
せきの清水
岩のかきそ乃
寂蓮住吉

富士山
清見潟
関路晴嵐
うちそなふ
みとのあま衣
浦風に
うらうらと
波の関守
孟郊詩意

奥津川

續古今
清見潟
波の関
こゆるたび
関絶えをせて
誰こゆるとき

従二位家隆

光行記
くゝ紀崎といふある甚危険の岩ほ有風なけれ
ばこゝを漕過ぎ
ず
清浦を漕ぐ
まゝ
うちかゝる
波
ねさし風なきわたり後の岩ほ
三首
波の音くゝ紀ノ崎よりこちまでめりこゝも見えぬ風のなきに
新後撰
清見かた浦風寒し紀の海
藻塩中に
波の羅ちとかや今はいふ久岐賀浦といふ所こゝあり
こゝほみちねんでゆきて此人をたのむ
時かよひくる
奥應海道記
岫崎といふ
通る
岩ほ
清見潟
関戸
波
翻る
波浪
行客
通る
巌
幽
波

の景をだに眺うる多ければ
れ仲中ふあこうる紙れる瀏帆飛く
波うまれくみ雲夕陽ひくく紅蓋
をのこころ身ははぞ先
ひれる波の面
大和田浦ハ駿州志ニ云古へ菴原
江の濱ありて大和田浦といふ後世
田新田あり
西成郡の内神崎と尼ヶ崎のあひだ
古名大坂入津の舩まりあふ泊る
と漬りと書しも非ス万葉の大和
兵庫ともに十里ばかり
ふ漕しぬく大和田神崎江口
してあり
豊臣秀吉公ニ後の事ニ
柚師浦風土記云烏度濱より東ハ柚師浦ハ又或ハ云柚師浦ハ
江尻くらの狭次第まさく狭いて
いつるうんの出雲國ふ同名ありて
柚師浦ハ古俤なし
磐城山今の薩摩山ハいつ右ふいて本
ありしお古縁多し

持船村小坂村のあたりまでふ入
陸地ことなり今大和
江ハ志賀郡坂本のあたり松ハ
西成郡ふあり駿州志ふ大和大濱ハ兵庫の津の
古名ニ大坂入津の舩まりあふ泊る古ことり総て故ふ万葉ニも舩の泊る
と漬りと書しも非ス万葉の大和田ハ大坂ことり武里餘北しくて
兵庫ともに十里ばかり漕ぬく大和田神崎江口
してあり
豊臣秀吉公ニ後の事ニ
柚師浦風土記云烏度濱より東ハ柚師浦ハ又或ハ云柚師浦ハ
江尻くらの狭次第まさく狭いて
いつるうんの出雲國ふ同名ありて
柚師浦ハ古俤なし
磐城山今の薩摩山ハいつ右ふいて本
ありしお古縁多し

万葉
磐城山直越來益礒嵩乃許奴美乃濱ふ吾立將待
寄二風一
沈れるきいそ紀の濱の志乃波ぬのとまろ
ふ乃
船石阪山ふえくねれる後勝
家集
山の名の岩ふも表ふ波ぬさまみ
芒硝嶺
磐城山の峠ふ西の
萬葉の細ふのりて上
ふ芒硝ふ
大阪ふ至る

磐城山ハ今の薩摩山ハいつ右ふいて本
ありしお古縁多し

万葉
磐城山直越來益礒嵩乃許奴美乃濱ふ吾立將待
寄二風一
沈れるきいそ紀の濱の志乃波ぬのとまろ
ふ乃
船石阪山ふえくねれる後勝
家集
山の名の岩ふも表ふ波ぬさまみ
芒硝嶺
磐城山の峠ふ西の
萬葉の細ふのりて上
ふ芒硝ふ
大阪ふ至る

絶ゆ女房を慕ん　哀の海

拂ひし什領い絶ゆふーえめまの寅の方ふ富士の高根白妙ふして時ふ
吾ふあらーず卯の方ふ愛鷹山已の方ふ伊豆の岬酉の方ふ三保の
松原みな緑ふえくえうて家ふい江海渺然うして水面さ哀の波ろふ
鮑とる海士業螺狭漁夫夏ふ保辺の蛍振うふろーうさ初雁の渡る

豊積神社　駿原郡町屋原村にあり

奈神木花開耶姫命　同元年坂上田村將軍東夷征伐の時祈願をなして再興あるむねの官幣を社號云々

時常幣社司と記す例なり四月初酉日十一月初酉日二度の神祭あり

由井（駿河）　駿原を焼ノ下ニ

輕風湯井　由井濱

蒲原古城　蒲原の西向田村の北にあり永祿中小田原小峯新三郎縄重

秀鑑多日調防守長宗荒川豊前守信氏大軍ヲ率テ押寄ル家臣吉田左近允兼宣落合

十二月六日武田傳右衛門等一番ニ城ニ入ル城ニ乗込戦ひ久シク北条方利ヲ失ヒ

市之進初陣ニ討レ終ニ城ヲ攻取ル

救千騎神原ニテ武里三十町富士川ヲ渡リ手里八町ニテ武田方ニ属ス

蒲原（駿河）　又名の方ニ吹上ノ濱アリ小六本松アリ浦原ノ邸アリ

里俗旧ムシロ地ト云ヘリ

時ニ天正ノ比小野某ト云ヘル者ノ領ス

里人隣ノ塚ノ下ニ古井アリ

ニ十二町ニ

波ふむれわら小舟をうけ聲をよく氷と見ゆる冬の月かげいと寒く

ふくしてわれ十番騎の兵ニ一時ニ攻破り

通の巷ニふりくる霰腥く尸を路ニ埋ミ

薩埵山の合戦ニハ其年小冊

甲斐の武田と爭ひしも山嶽を拓

関ニ要害ニ守ニ堅ク

干戈ニ吉永く絶ク礼楽ニ変ル

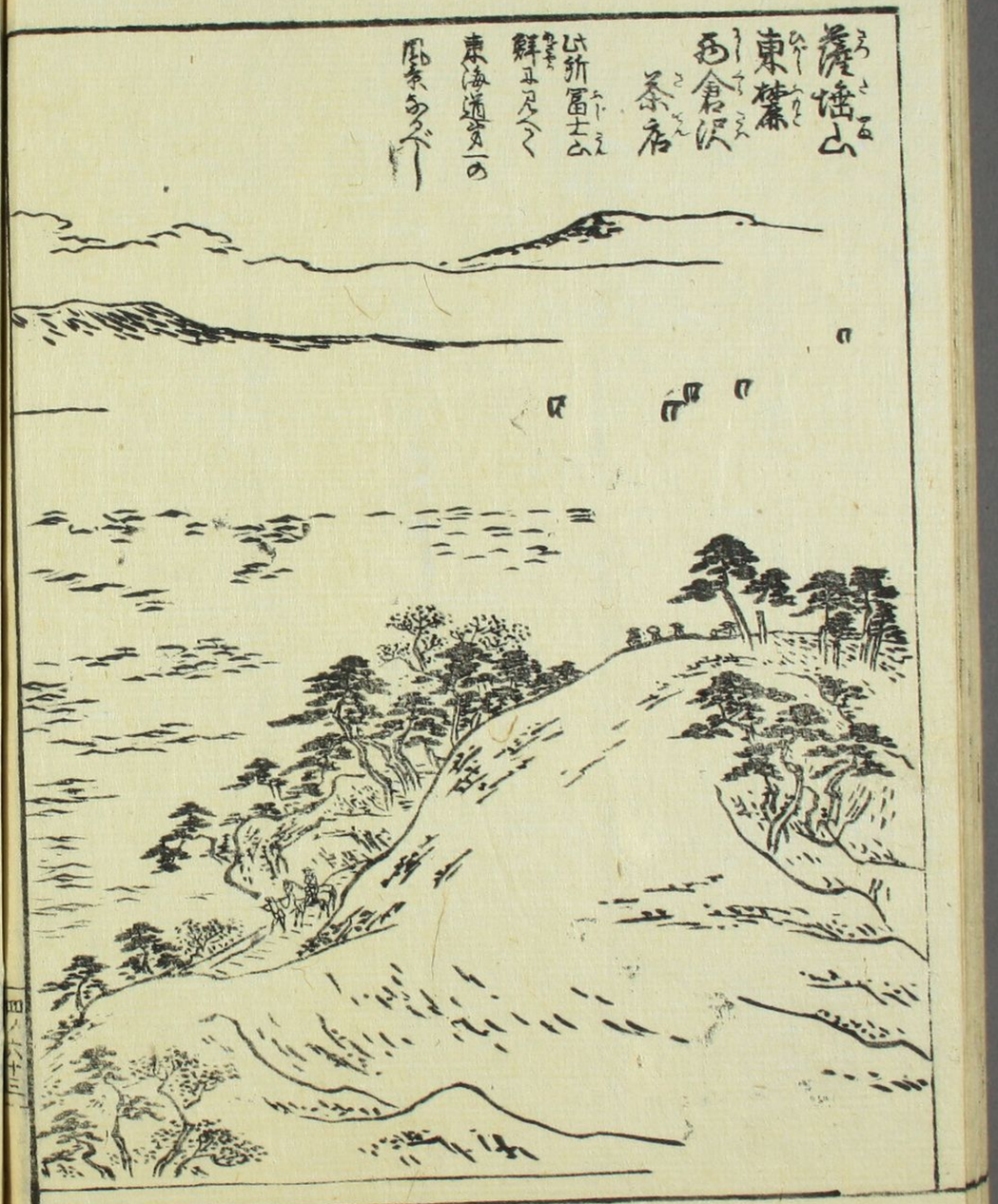
風色依賞ニ飲よく詩ニ人多クシテ

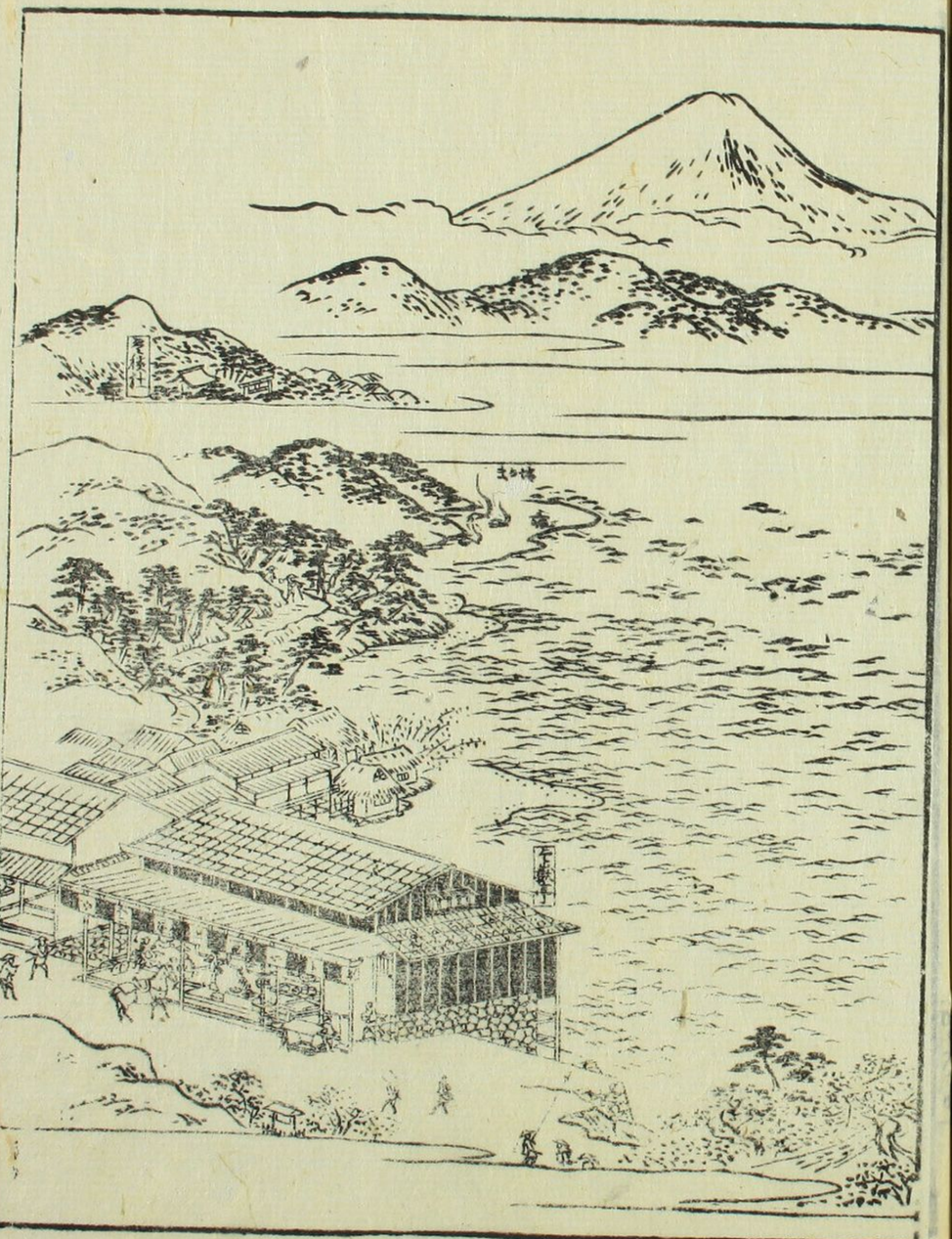
名産栄螺鮑　薩埵山ニ赤の蠑西倉澤ニ栄螺鮑

しこ三保の松原ニ道中ニ

高ニ詩ニ

歩ニ多ク


富士山
東海
西倉沢
茶店
此所富士山
絶景第一の
風景なるべし



富士川

富士川

駿河富士郡より駿河国を経て遠江国に入る。源は信州八ヶ嶽より流れ九甲州に到りて諸流会し、なお数百里の幅ありて滔々と除限なく

[illegible]

船よそふ富士の川辺に日を暮ね

[illegible]

なれてもさびしき旅を雨ふる川のいそ伝ふ

[illegible]

朝日さすたるひれみ雪を眺てたちもとろふ

新撰髄脳

雨ふる高根の雪ふりつもれて山とやのぼるうづの白雪

[illegible]

浮橋ふ竹のとろはる寿をそてをふる

[illegible]

裳ひのえうのとい氷るふゆ川のわれも浮寝城をそねらん

[illegible]

算も多をちけの水れ志ぐれ富士乃川を称をそ絶をれ

[illegible]

吹ふ落雪をのこれで白妙ふまさこそ見えぬ

[illegible]

あらんとはふひてこれとう川のはのふをまさこそ見えぬ

貞慶海道記

蒲原沢立てはるふ沢べ花落ふもそ

さざらね沢ほふさぎりをのをいの野ふ茅

[illegible]

先後れあられい沢藤け野ひをふひ〳〵ら〳〵まをぐる拉ふ富士川を渡ぬ

山の中ふ多様ふ石沢流れ巫峡れ水のこゑんど舟ふのりてくだる人の如ははる

ようもさ〳〵久まで老馬沢たのそれ多ふ行ふ浜ふ老馬〳〵浜い勢色をふ

山路の雪のこゑあ〳〵沢川の左の水れまて流もよくかりふまり

吉ふ笑〳〵ふさうさ山のつくりそ左ふ峨〳〵富士川のあ

東関紀行

我めけ〳〵甲里沢生ふ川富士川の水源をれいをふを蒲原まてと人〳〵

さうぐさうの山春う〳〵安倍川を海うて左ふ文川水れみさふそめられぬるを

いぶせ〳〵さられ富士の根をさのふれまた見ふもあぢ分ふ乱ふもそ

あくふ日沢さくをさ清歩〳〵もぐ〳〵高根をいほりさん浜うふぶび富士乃

沢舟十一日酌ふ着るう〳〵ちう勢なれいをふりまてこそふう出れば

富士川のつくりまちて生ふ歩は初それは高根を要ふうめる　冷泉為尹々

西行紀行

孟園ふ名を得る大いにあまさふ川ふ海道第一の急流也

舟ふまふ〳〵つるふ浜〳〵ちちう沢歩〳〵て竿とさう〳〵穂沢押生ふ時落う

見るもの聞くもの哀しく思ひ旅中の人の目を驚かし魂を消す所なり

拜来停馬此蹁躚。天下治乎豈獨五

河畔爲通名利路。陪陵慙愧一樵夫　羅山

水神森　冨士川右の山際にあり巌上に松柏生茂れり昔は此川筋

此森の中の瀬と名付る所より岩本の下へ流れ或ひは数多支流して水神

八十年ばかり以前より長堤を築き神の叢に築つけしより水筋定りて洪

水の時も此堤の内に流水の流るゝ事なし因て此堤を鎮…といふ

三人孫…鈴堤といひならはしけるとぞ

冨士川并古蹟　冨士川の東に浮島が原の大沼ありけるに寄手の兵ども平家の軍勢の羽音に驚き逃去しは冨士沼の事にて今の吉原ちかき所なりと云　駿河記に吉原宿は今の泉といふ

今の吉原は是より五里其地に平家越と云所あり治承の乱の遺跡なりとぞ

東鑑云

治承四年十月廿日武衛令到駿河國賀嶋給。又左少將惟盛。薩摩守忠度。參河守知度等。陣于冨士河西岸。而及半更。武田太郎信義。廻兵略。潜襲件陣後面之處。所集于冨士沼之水鳥等群立。其羽音偏成軍勢之粧。依之平氏等。驚騒。爰次將上総介忠清等相談云。東國之士卒。悉屬前武衛吾等。憖出洛陽。於中途已難遁圍。速令歸洛。可搆謀於外云云

平家物語云

去程に右兵衛佐頼朝のよし風聞ありしかば福原には公卿僉議

有て今一日も猶予せずば討手をさし下さるべしとて大将軍に小松

權亮少將維盛副將軍には薩摩守忠度侍大将には上総守忠清を

として都合三萬餘騎治承四年九月十八日新都を立て十九日には舊

都に着し同き廿日東國へぞ打立れける中略十月十六日には駿河の國

清見関にぞ着にける都をば三萬餘騎で出しかども路次の兵を付副て七萬

餘騎とぞ聞えし先陣は蒲原冨士川に進み後陣はいまだ手越宇津

の屋に支たり中略大將軍維盛東國の案内者とて長井齋藤別當實

盛を召して汝程の強弓の精兵東八箇國にはいか程あるぞと問ひ給へば

齋藤別當あざ笑つて申けるは君は實盛を大箭とおぼしめし候か僅に十三束こそ仕候へ

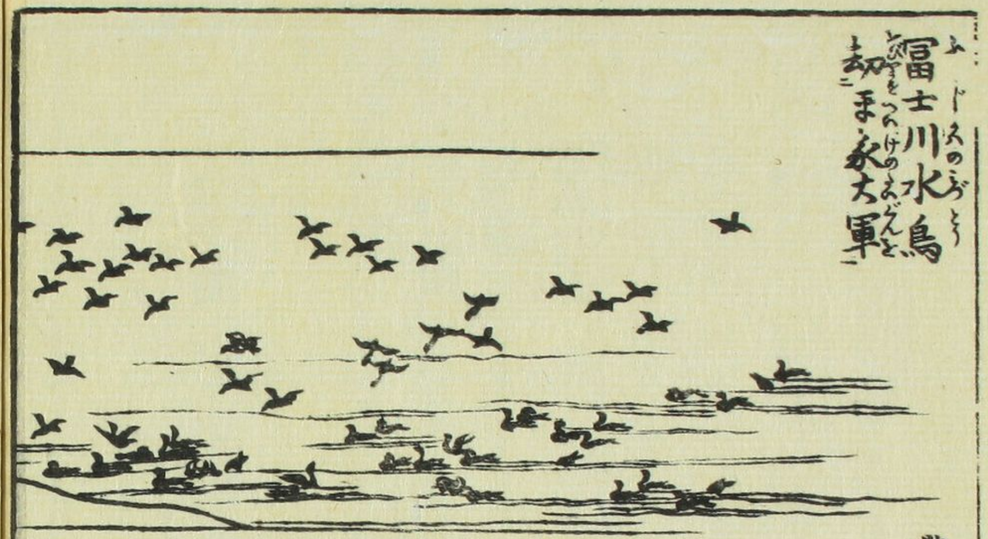
實盛程射候者は八箇國には幾等も候大箭と申す者の十五束に劣て引

は候はず弓の強さも健なる者の五六人して張候然る精兵共が射候へば鎧の

二三兩は容易く射徹し候大名と申す者の五百騎に劣て持候

ず候はん馬に乗て落る道を知らず悪所を馳れども馬を倒さず軍は又

ふじかわのみづとり
富士川水鳥
とぶをつけのまぐんと
ともまちまる永大軍



将軍後陽成院勅命
歌川国芳画

伏拜こそ礼全頼朝が私の高名ふ非び偏ふ八幡大菩薩の御計ひとぞ宣ひ
々々聽〳〵ふ叡慮所ふ被ら〳〵駿河國をは一條次郎忠頼遠江國をば安田
三郎義定ふ頒らる猶も續〳〵責べ〳〵しくも後も流石覺束う
〳〵駿河國より歸給ひ鎌倉へ御帰らる義勢ふ
富士川の瀬々の岩こけのようもまくも義ある伊勢平氏ふ
天辰根國の御前ふそ平家お始め奉て逃
去〳〵ハ富士沼の岸ふ若徳寺ハ今所ふ齋藤別當ふ東國ふ落兵
多ふ集ふ給ふ〳〵ふうて平家ふ隠病神のはまて少のやくあふ〳〵ふも
御前ふ仕ふ〳〵ふ某ふ御前ふ従ひて辨士ふ〳〵て敵のふを誘ひ〳〵むる事ふ
いふる〳〵是ふと伯ぜふる事も吾ふ今の様ふ玉ふ耳ふそ留まりて覺ふ仕ふる
闘國 中分 源 與〻平 東 方 氣勢 盡 豪 英
何ふ猥 鐵 八 公 山 上 笠 是〻 旌 旗 木〻 是〻 兵
曽我兄弟秀名 富士川の東平恒の左れ山際原ふ所ふあり江人曽我八
幡 ふ故討の名信ふ吉側ふ久沢ふ宗
猛泉寺ふいうあり
脾あり十郎祐成と高崇寺原ふいひ又郎時宗ふ鷹無院石士山

お入候多数の高大木ありて昼猶暗き程の故を持ちて何となくお群がりおそろしきやうすなるを縁起と称されて御詣り行程の半ばにも果ず紀さるゝお松元ふさてる
左刀疵ならんとする所を優しき故の振舞なりといふ事ふりの肩より右まで
脳の下板までそも通れしとは我ら切付られ刀も得ぬりや應と剛勇て
疵の上より疵を上て真二板まで切通しと下役まで切入るも理や武源氏重
代の友切丸のたまるべきまゝふはぐく所存ゝ敵加かるり狼しも是
ぞ一志念捧へや時宗忌ふそ刀でうそ斬うれ云
古家川 古原の西にあり和名抄富士川の支流ゝ南流ゝ南流ゝ
三度橋 其幅未大坂のごとし永禄
源頼神社 高祖の山麓にあり延喜式内又三代實録援正二位ゝ富士山ゝ
後援歌 四月廿日ゝの社にて祭礼ゝ流鏑馬あり
新勅撰 もるかのゝの雪ゝ
早振神社の周辺 社頭の清泉ゝ